

逆巻く子

ふじみや一

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

他の世界から5歳の時にブラボの世界に転がり落ちた子が、ブラボ世界に生きる男女に拾われて成長し、男女のことを父と母と敬いその世界で生きることを受け入れた。

狩人である母が獣狩りの夜に出かけ、明けない夜の間父が獣の病に侵されて涙ながらに子に最期を求め、それを殺し、蛆虫が沸くまで抱いて泣き続けた子は、蛆虫を媒介とした感染症に苦しみながら次の獣狩りの夜に狩人として足を踏み入れた。

怨嗟を吐きながら獣を狩る子が、母の亡骸を求めて彷徨い歩く話。

※主人公は狩人や獣狩りや教会のことはなんとなく知っているが、現地で生きている一般人以下の知識量で進んでいきます。主人公は女性ですが性的なことには無関心であり、愛というものは両親の姿を見てその両親の中で完結させています。できるだけ暴力的に、拷問や血なまぐさい描写をしたいと思います。

ちなみに他の世界というのはTOV世界からですが、作中にはまっつたく触れることはありません。

目次

1	1	1	1	1	1	9	8	7	6	5	4	3	2	1
5	4	3	2	1	0									
79	73	68	60	55	50	45	39	35	30	23	18	13	7	1

ヤーナム市街

1

よくも、私に呪いを。

呪いのように身体を蝕む病に内臓を食われていく。

身体の内側で不定形の蟲が我が身を食らい、ぶくぶくと肥満化していきやがて私の身体を突き破り這い出て来る。

よくも、私の父と母を。

母は狩人であり、明けない夜のうちにふらりと出て行き血の匂いを纏わせて戻ってくる人だった。父は一般的な人であり、そんな母の様にいつも痛ましい顔をしていた。

母は血に酔う狩人だ。だが理性もある。獣となる一歩手前で踏み止まり、人としての理性を保ち父と歌を歌う、そんな人だった。

しあわせだったのだろう。

血のつながっていない父と母を想って私は熱い息を吐く。よくも、よくも、と怨嗟を吐いて血を浴びる。そいつらはきつと無罪の者たちだ。そうなりたくてなったわけではない者たちだ。だが私からしたら存在するだけで罪に値する者たちだ。死ね、死ね、死ね、殺す、殺してやる、息絶えろ、死ね、死ね。

のこぎりと鉦の仕掛け装置を片手に振り下ろす。獣が持っていたものを奪い取ったものだが、今では私の手によく馴染む。

小さな頃に、手足の長さが十分ではない幼くひ弱な私を拾ってくれた父と母。

歌を歌うのが好きで踊りも組み合わせた職に就いていた二人は、今は私の傍にいない。

記憶が遡る。大人になる前の日の蛆を思い出す。

獣狩りの夜に父が獣と化していく己の身に咽び泣き、犬の顔と相違ない顔で私に最期を求めた男を、同じように咽び泣き引き裂いて、蛆が沸くまでその身体を抱いて母の帰還を待っていた夜。

夜が明けても戻って来なかった母は、今はどこにいるのかも分から

ない。

十分な手足が揃った。

手足の長さはこれ以上伸びることはないだろう。

私の身体には蛆がいる。父の身体を食い荒らした蛆はころりと落ちて腹を見せ、羽化して蠅となり飛んでいく。父の身体を抱いて泣いていた私の身体の中にもころりと腹を見せる蛆がいるだろう。父を通して私にも獣が移ったことだろう。

それは呪いだ。

病と称した呪いはヤーナムから流れてきたものだ。

私の父と母は古都ヤーナムから遠く離れたところに構えられた住居の中で暮らしていた。山間部に隔離された病が何故父の身に起こったのか。それはきつと呪いであるからだろう。空気を漂い人々に憑りつく亡霊と同じく、あの古都の呪いは母を追って来て二人のしあわせを妬んだのだ。

あの街の呪いは己の内の獣を具現化させ互いを食らい尽くす血の病だ。そこには破滅を望む醜い妄執が凝り固まっている。

その呪いが私の身にも宿った。

日に日に細くなっていく己の手足。身体。瘦身になり内臓も削り、軽量化された己の身体。母の部屋に掛けられていた黒の狩り装束に身を包み、訪れた夜を彷徨い歩く。

血を。獣の血を。

狩人として在る私を見つけて、人の名残を残した獣が襲い掛かってくる。

よくも、よくも、のうのうと生きやがって。

病を体現した獣共を割いていく。生意気なことに人と同じ血の色をしていた。

この街の者たちは灰色の血をしているのではなかったか。

腰に帯びていた油壺を取って獣に投げつける。油塗れになったそいつに向けて、もう片方の手に持っていた松明で殴りつける。絡んだ

油は犬のように生えた毛と非常に相性が良く、よく燃える。

卑しい身体、獣性に絡んで味わうように舐める炎を払おうと叫び、転げまわる様が笑いを誘う。身体を小刻みに震わせて笑い、松明を落として腹を抱える。げぼりと唾液と血が混ざった泡が口からこぼれる。

肉の焦げる生臭い臭気と断末魔が目の前を転がり、それに向かってのこぎり鉋を振り下ろす。

死ね、そのまま死ね。生きようとするな。

罹患した病を治療してやろうと言っているんだ。そう、私が言っている。

昔はうさんくさいと思っていた教会の者の教えはひどく正しかった。

口から涎を垂らし人の血肉を食らう獣など、人であるはずが無い。

私の父はそうなりたくなかったから私に治療を求めたのだ。私はそれを叶えてやった。だから私は正しい。間違っていない。私は自身の内に蛆を飼っているが、それを逆手に取って治療を行うことができている。

母もきつとそうだったのだろう。

私の内側の蛆共が自身の血肉と似た血を求めて酔う。

もつと甘い美酒をと私の身体を食らう。痛みに突き動かされて振るう鉋は甘く生臭い血を誘発する。

ああ、私は。

「……そこにあんた」

誰かが私を呼び止めた。

次の獣を探して彷徨い歩く私を呼び止める者など誰一人いなかったというのに。

獣共は人の言葉を使つてこちらに侮蔑の言葉を吐いてきていたが、そこに人としての理性など無かった。だが今私を呼び止めたその声には理性が宿っていた。私は声の聴こえた方を見やり、そこに黒い影があるのを認めた。

「あんた、理性はあるのかい」

年配者独特の味のある声質。女性の声と言葉に私はひどく嬉しくなった。

私には理性がある。それは人として当然あるべきもので、それを認識できている私は身に蛆を宿しながらも人として在れる者なのだ。

私は彼女の言葉に是と応え、彼女が誰かと問う。

「……そうかい。それならいいんだけどもね。あたしは狩人狩りさね」

狩人狩り。その言葉の意味を私はすぐに理解した。

狩人の装いをした獣を狩っている者か。狩人の装束に身を包んでいれば数秒は時間を稼げるだろうからな。よもやこの女性は本当の狩人を狩っているわけではないだろう。狩人のフリをした獣がここにはいるということだ。なるほど、なるほど。それならこれから気を付けるとするか。狩人と獣を見分けるために声をかけ、敵味方を判別していく。その作業が必要だった。

ああだが。それなら、狩人狩りの彼女ならもしかして母のことを知っているだろうか？

「……ふうん？ 母を探して、ねえ……。得物はなんだったんだい」
母が持っていたものは……。長剣の……。鞆と組み合わせると強力な武器になる……。それと、血を使用するといわれる銃を……。

「水銀弾は血を使っているから全部の銃がそれさね。長剣、ねえ。ならあの歌謳いかね」

母は歌が好きだった。

父と一緒に歌って踊るのが好きだった。

それを職として皆を楽しませている明るい母だった。

血に飢えた獣の衝動を抑えていつも苦しそうな母だったが、それでも人間だった。

私はその人かもしれないと言うと、彼女は一步前に出てその姿を現す。

鴉のように黒い羽を身に纏った、顔の窺い知れぬ人だった。

「……あんたは、なにをしにこのヤーナムにきたんだい？」

私は母を探しに来たんだ。

「あなたの母親がもし しんでいたとしたら？」

それでも私は母を探すつもりだ。その亡骸を抱いて、墓に埋めて、私は理性を灯した母を父と一緒に埋葬するために来たのだ。

「その身体では永くはないだろうねえ」

それでも私は、私は母を探すのだ。

父は泣いていた。母にすまないと謝り、私にも謝り、絶望の底で生きることを諦めなければならなかった父のところに、母を連れ戻したいんだ。

明けない夜など無いはずだ。そう、何度も何度も母たち狩人は夜を明けさせた。

理性のある人間が獣を狩り、そうして平和を守ってきたのだ。

父は獣となるのを厭い、私に治療を求めて私はそれを救済した。その時の吐く息と安堵の表情を私は忘れることは無い。だから、だから私は母を探すのだ。

「あんたは夢は見るのかい」

なんの話だろう。

夜が続いても私は眠ることが無い。

蛆がガリガリと私を囓り立てるからだ。

寝る暇などありはしない。

「……あたしが決めることじゃあないんだけどねえ。来な。呪われた夜道を歩き続ける気があるのなら、あたしがこの夜にあんたを招いてやろうじゃないか」

……ああ、私は。

私は母が見ていた世界とは違うものを見ていたのだろうか。

ずるりと、こぼれかけた内臓を押さえて私は彼女の後を追う。

会いたい。血に酔う母でも、父は母のことを愛していた。困った顔をしながらも母を愛していた心優しい父の下に母を連れ戻さなければ。

それが私の、小さな頃から二人に与えられている恩に報いるための事のはずだ。

身体を蝕む蛆によくもよくも呪いを吐き、身の中に留めておけな

い病を吐き出して血臭を漂わせ、私は鴉の背中を逃さないように追従する。

よくも、この呪いを。

よくも、私の父と母を。

よくも、この病を。

死ね、死ね、死ね、生きるな、殺してやる、殺してやる、よくも、よくも。

ずるずると脚を引き摺った。

黒々としたものが私を見下ろしている。細く長いくちばしは肉を啄ばむためだろうか。赤く色づく一對のレンズは私の死期を見定めているのだろうか。

ぼやける視界の中でそいつだけを見る。そいつは何かを言っていた。悪い夢のようなものだ、と聞こえた。

夢。

腕の内側、柔らかい部分を何かが這うのは夢だ。

ぞりぞり、じくじくと不快を伴う痛みは現実で、体の中の何か悲鳴を上げているのはどちらなのか。

痛み、激痛に対して悲鳴を上げるのは本能的なものだが、ぞろぞろと心臓を指して腕の内側を逆流する血の痛みには私が声をあげるほどでもない。

何かが悲鳴をあげている。私ではない。その何かが分からない。霞がかった思考を振り払おうと頭を動かすが何かに顔面を押さえつけられた。

やめろ、と声を荒げて押さえつけられた指の間からそれを見る。

ああ、と声がもれる。

見たことのある獣が私を見下ろしていた。

私を押さええている手には人を引き裂くにも事足りる長い爪。無造作に生えた強靱な毛が顔面を覆い、瞳だけ、その部分だけが変異する前の者の面影を残した、弓なりに細められた目。

おかしい。これはおかしい。これは夢だろう。父は、獣に成り果てた父はもう腐り果てて蛆にたかられていたはずだ。よく知った獣は父の瞳を持っているにも関わらず獣性に満ちていた。お前は誰なのか。

父は母と同じく理性を灯した人間だ。見た目が獣になったとしても人の心を持つ人間なのだ。

父の瞳を盗んだその獣は、ゆっくりと獲物を甚振るかの如く勿体ぶった動作で顔を近づけてくる。生臭い息を吐き、口の端からボタボ

夕と灰色の血を垂らす。私の顔面を覆う大きな手に力が籠められ、爪が頭の皮を裂いていく。

父を冒瀆するのか。

獣風情が、呪い風情が卑しくも人間を超越したと笑うのか。

あらん限りの怒号と憎悪、攻撃性をその獣に向ける。よくも、と怨嗟を吐き捨てる。

焼かれてしまえ、と私の血に乗った呪いを相手へと被せる。

父の瞳を持った獣は私の呪詛に笑い、大きく口を開く。顔面を押さえつけていた手が横に滑り、愛しいものを扱うように指先が添えられる。口腔の赤、黒々と蠢く舌が見え、大きく大きく開いた肉質が私の頭を啜え込み、——ゴキ、と頭蓋が砕かれ中身を飛び散らせた。

あ、ああああああ？

目が見えない。ゴキリと何かが聞こえた。ずるずると何かを啜るおとが聞こえる。

?
???

びくりと身体がふうえて、ずるずるとなにかをすすられえ、

??
——…!!

しえれも、ようも お、おくも と、わ あしは、

——!!
あ

「狩人、さま……? 狩人さま……?」

ゆさゆさと全てが揺れる。誰かに揺り動かされているのだと気付いた私は大きく反動をつけて飛びあがった。

うつ伏せに倒れていた状態で勢いをつけて立ち上がったものだから若干ふらついたものの、私は目の前にいる何かを視認することができた。

この世のものとは思えない端正な顔で無表情に私を見上げる女だ。

……女？

状況が理解できない私はその人形のような女性の姿かたちを理解しようとうろろと視線を彷徨わせる。

ほっそりとした顔立ちと動作に見られる女性的な雰囲気。衣服は首元にリボンが巻かれ、外套も短い。少し古めかしいが女性の格好だ。

私はぼんやりとその女性の顔を見る。

白い肌が無機質で、端正な顔立ちも相まって非現実的だ。

女性はしやがみこんだ体勢のまま私を見上げ続けていた。

「狩人さま、私になにか……？」

人形のような女性から発せられた言葉にハッと我に返る。

い、いや……、と所在なさげに辺りを見渡す。周りの風景は私の記憶の中に無い場所で、花壇に沿うように緩やかな勾配を続ける石畳と、見上げる先には存在感のある屋敷がそこにあった。

ここはどこだろうか。

「ここは狩人の夢の中。あなたは夢を見られているのです」

夢を？ ……ああでも確かに、こんな非現実的な雰囲気のある場所なんて私は知らない。空を見上げると灰色に染まっていた。ずっと先まで雲が空を濁し、風もあまり無く花壇に咲く花も絵に描いたもののように無機質に佇んでいる。

そうか。これは夢か。

「はい。……狩人さま、変なことをお聞きしますが、私とお会いしたことはございますか……？」

ゆるりと立ち上がった女性は私よりも背が高く、今度は私が見上げる形になった。彼女の言葉に一応は考えるが、こんなに綺麗な人を忘れるわけがない。すぐさま首を横に振った。

「そうですか。……そうですね……？」

首を傾げる彼女に私も首を傾げる。

お互いなんとも言えない状態になる。

少し居心地が悪い。どう反応したら良いか分からずに困っている
と、彼女が身体を曲げて頭を下げた。

「はじめまして。狩人さま。私は人形。この夢でああなたのお世話をす
るものです。狩人様。血の遺志を求めてください。私がそれを、普く
遺志を、あなたの力といたしましょう。獣を狩り……そして何より
も、あなたの意志のためにどうか私をお使いください」

人形。世話をするもの。血の意志。

一度に色んな情報が与えられて困惑する。人形のようなだとは思っ
ていたが本当に人形だとは。

使えとはどういうことだろう。彼女は獣を狩る私のサポートをし
てくれるということだろうか。

戸惑っている彼女が私の前に跪き、両手を差し出してきた。

「狩人さま、今あなたは多くの血の意志をその身にお持ちになってい
ます。狩人さま、あなたは何を求めますか？」

何を言っているのかよくわからなかった。

途方に暮れた心境で彼女の無表情を見る。

「獣狩りの夜を渡る力に、何を求めますか？」

その言葉に目を細めた。

獣狩りの夜。ああそうだ。そうだった。

私は母たち狩人のように獣狩りの夜に足を踏み入れたのだった。

獣を狩っている際に不便に思っていたんだ。獣を【裂く】力が圧倒
的に足りない、そう思っていた。

蛆が這いまわる私の身体は骨と皮と少しの肉で保っていた。力な
ど入るはずも無く、ノコギリの刃で獣の強靱な毛と少しの肉を削る程
度に終わっていたのだ。

私は獣を効率的に裂く力が欲しかった。

「分かりました。では、意志をあなたの力といたしましょう。狩人さ
ま、御手を」

彼女の前に手を差し出す。

彼女は私の手を包み込むように両手を動かし、だが触れないところ
で静止する。

「目を閉じていてくださいね」

そう言われて素直に目を閉じる。

この感覚は知っている。手から心臓に向けて何かが逆流する温かさだ。

何かが悲鳴を上げるわけでもなく、温かなものが身体中を覆う感覚に安堵を息を吐く。

そういえば、身体を蝕む蛆共が発する痛みが無いな。……ああ、夢だからか。

「かりゅうどさま？」

目を開くと、彼女が立っていた。不思議そうに首を傾げている。私は差し出していた手を確かめるように軽く握り、動作を確かめる。

「かりゅうどさま、どうかされましたか？」

いや、なんでもない。

私は力を得たのだろうか。

「はい。りゅうどさま、……これを」

人形の手が横に移動する。何かに視線を誘導させるその動きを追い、地面に生えた何かに目を向ける。

白くて小さな何か達は私に銃のようなものを差し出していた。

大きく長い銃と、それよりも切り詰めた銃。

私は自身の手を確認する。私の腕は変わらず細く頼りない。こんな成りで重たそうなものは邪魔になるだけだろう。私は短銃を手にとった。するすると地面に吸い込まれて消えた小人たち。人形に顔を向けると、彼女は相も変わらず無表情で何かを言った。

「いつて　しゃ。　あなたの　め　が　ゆういな　も　でありますよ　に」

脳みそが零れ落ちている。

それが感覚で分かった。とろとろとこぼれおちる液体に乗せて肉が流れていく。

目がぐるりと白目を剥き、ぐしやりとその場に倒れる。

??　?　??

夢のなかでさえも、こうも、こうなって、なるのか。

私の身体は小人たちのように地面へと溶けていく。とろとろと、

すべてがながれ出て行く。
とろとろと、みずのように、えきたいとなって、とろとろ、とろと
ろと、うみになっていった。

うう、うう、と息苦しさに音を漏らす。

びくびくと痙攣する目を開くと見慣れぬ天井が見えた。

痛みがある。夢の中では痛みなど無かったというのに。

痛みから逃れようと身体をよじると、浮遊感があった。

ガシャン！ と盛大な音と共に身体が床に叩きつけられる。

肩から落ちたらしく、薄い肉体は中の臓器を守れずに抉られるような衝撃に噎せた。

ずるり、となんとかうつ伏せになり床を搔く。

ガリ、ガリと爪を立てて痛みに耐える。

なんとか痛みを呑み込み、周りのものを冷静に確認できるようになるのに数分を要した。

ふう、ふうと息を吐いて身体をゆっくりと起こす。二足で立ち上がった時に眩暈がした。

蛆がまだ私の中を這いまわっている。……不愉快だ。

私が今いる場所はどこかの一室のようだった。

私が寝ていたと思われるストレッチャーは横倒しになっており、近くに点滴スタンドも倒れている。壁には戸棚があり、薬品と思わしきものや器具が多く置かれている。

医療の場、だろうか？

部屋の中を調べると椅子の上に紙が置かれているのを見つけた。

「青ざめた血」を求めよ 母の謂れ 狩りと共に」

それだけが書かれたものだ。

青ざめた血、とは何か。その説明も無い。

狩りと共に、と書かれているが青ざめた血とやらは狩りに必要なものなのだろうか。

身分の尊い者の血のことを言っている、ということでもないようだ。

青ざめた血、凍った血？ 凝固した血のことか？

母の謂れとは、私の母のことか？

そもそもこれは誰の字なのだろうか。

考え込んでいても仕方がない。

私はその紙を椅子の上に戻した。

自身の身体を確認すると、狩り装束を着ていなかった。ズボンはそのままだが、上の黒い装束は脱いでいて中の薄いシャツ一枚だ。右腕の袖が捲られ、肘の内側に輸血用のチューブが垂れ下がっている。私はそれを取り払って床に捨てた。右腕は包帯が何重にも巻かれている。それも取り払っていく。

包帯の下は見慣れた細い腕と、血管に沿うように何度も針を刺した跡があった。

何度も血が流れたのか乾いた血の筋が多くある。私が寝ているうちに何かをされたようだ。

私はこの医療の場に来る前のことを思い出そうとした。

…… どうして私はここにいるんだったか。

それに私は誰なのか。名はなんだったか。

地に足がついていない、心臓を中心にじわりと不安感が広がる。自分の名を忘れるだなんて、そんなことがあるのだろうか。記憶の欠落。経験したことのない出来事に、何をされたのかと不明瞭な陰が不安を煽る。

両親との記憶はある。私自身の記憶も……ある。

私は、私は……。

母を、探しに来たはずだ。

今は亡き父の墓前に母の亡骸も弔うために、私は古都ヤーナムに来た……はずだ。

……？

母は亡くなっていたのだったか。

軽く痛む頭を小突いて思い出そうとする。

…… 亡くなっていた、はずだ。

母は狩人だ。獣狩りの夜を明けさせる大任を担った狩人たちの一人。その母が夜が明けても帰って来なかった。古都ヤーナムに亡骸があるからだ。ヤーナムから帰ってこない理由などそれしか無いだ

ろう。私は母を探しに狩人となって夜に足を踏み入れた。

大丈夫だ。……目的は忘れていない。

小刻みに震える手。不安を押し殺して母の狩人装束を探す。部屋の隅に雑に畳まれた服があり、その上に帽子も置かれていた。近くにノコギリ鉋が立てかけてあり、短銃と弾薬を入れるポーチもある。それと、見慣れないものもあった。

手の平の中に収まる細長い銀の試験管のようなもの。尻の方に押すところがあり、頭には針が付いている。軽く押すと針の先からぽたぽたと赤い液体が滴った。指先に乗せてそれを舐めると、血だということが分かった。

輸血用のものだろうか。

銀の試験管の下にまたしてもメモがあった。

【狩りを長引かせたいなら使いな】

走り書きだ。

使う、というのはこの血のことだろうか。

確かに、獣を狩る時に怪我などをするだろう。

失った血を補填するための応急処置みたいなものか。

五本分の輸血液があり、私はそれをありがたく貰うことにした。

狩人衣装を着込み、両手に持った武器の動作を確認する。

弾薬を入れるポーチには弾薬が十、短銃には七発入っている。

重さは感じるが、取り扱うには大丈夫であろう程度だ。武器を両手に持ち、何度も握る。大丈夫だ、震えは治まっている。

私はこの建物から出るために歩き出した。

薄暗いが物の位置は分かる。ガラスが嵌められた扉を開こうとすると、それが予想以上に重たいことに辟易する。私の筋力が無いからだろう。油が差されていない両開きの扉を、両手伝いに身体を使うように押し開く。

下に降りる階段が続き、ゆっくりと降りていく。小さな部屋に出たが、待合室なのか長椅子があった。部屋の真ん中に床板が折れて大きな穴が空いているのを見つけた。まるで何かに殴られたような穴だ。

床板に触れると結構しっかりしたものだというのが分かる。それ

に穴を空けるなど、相当な重い物を落としたかわぎとのどちらかだろう。

ぐる、と何かの唸り声が聴こえて口角が上がった。

なるほど、ここは安全な場所では無かったというわけだ。

足音を立てないようにゆっくりと歩いて次の部屋に行く。

案の定そいつはいた。

ストレッチャーやスタンドが多く並ぶ部屋の奥、天井に吊り下げられた灯りの下に四足の黒い獣がいた。

そいつは倒れた人の上に跨り、床を赤く染めている。……新鮮な肉を食らっているらしい。

幸運なことにその獣は私に背を向けていた。私はその背にゆっくりと忍び寄り、手に持っていたノコギリ鉋にありったけの力を込めて振り下ろす。

肉を削ぐ感触があった。

獣はいきなりの襲撃に驚いたのか無様に声を上げて前のめりに倒れる。

切り裂く力が、まだ弱い。命を狩り取るほどでもなく、獣は苛立ちしそうに私を振り返った。

ぐるり、と喉を鳴らして獣が私に迫る。無駄に吼えるでもなく速やかに相手を狩ろうとする様は良い。横に大きくスイングするように爪を振るう獣に危なげなく後ろに跳んで避ける。……身体の調子が良いな。

右、左と私を掴もうとするかのような大振りの動作に、短銃を差し込んで撃った。

獣はそれで体勢を大きく崩す。——ああ、ここだ。

考えるよりも先に私はノコギリ鉋を落とし、その腹にへと手を刺し入れた。

肉を貫通する感触と、肩口で聴こえる獣の息を呑む音。愉悦に目を細めて勢いよく腕を引き抜くと大量の血が溢れ出し全身に浴びた。

獣は後ろに倒れ込み、臓物をまき散らしてびくびくと痙攣をした。

生死がどうかは分からない。が、それよりも。

全身に浴びた血の内の一部が口に入り、私はそれに嫌悪を感じ唾と一緒に盛大に吐き捨てていた。

くそつ。

口元を拭おうにも手が血塗れだ。

くそつ、くそつ、くそつ。

近くのストレッチャーの上にあった小汚い布を引っ掴み、舌に付いた血を拭う。喉の近くの舌も拭ったため吐き気がしたが、そんなことよりも獣の血が私の体内に入るのが我慢ならない。

何度も何度も拭い、布が唾液だらけになったところで満足して放り投げる。

大の字に寝ころび、びくりびくりと痙攣する獣は恐らくもう死んでいるのだろう。

私はそれを眺めつつ考え込んだ。

さっきの戦闘で当然のように短銃を使い腹に手を突っ込んだが、私はこんな戦い方が出来る人間だったかな。獣の近くに落ちていたノコギリ鉋を拾い、それを変形させる。

……この武器は、変形するものだったのか。

狩人の母が一時期使っていたもので、その名称を聞いたことがあっただけだったのだが。……いや、知っていた、か……？

ガシヤリ、ともう一度変形させる。

まあいい。蛆が齧る痛みがあるが、身体の調子は非常に良かった。まるで生まれ変わったかのようなようだ。

じわりと滲む不安を呑み込み、無理にでも笑った。

獣を裂いた後、屋内を散策しているとこの場所がなんと言われているのが分かった。

床に散乱していた紙にこの場所の名前らしきものがあり、そこには「ヨセフカ診療所」と書かれていた。

知らない場所だ。あるいは忘れているのか。考えても仕方が無いか。

床板が剥がれて廃屋手前の状態になっているが、人が出入りしている形跡があるのでここは捨てられた場所では無いのだろう。捨てられた場所だったとしたら、人が出入りしているというのなら浮浪者あたりなのだろうが生活をした跡やらそういった汚れが見られない。

本来の持ち主が維持していると考えるのが妥当だろう。

公的に開かれているからといって持ち主がいる場所に長居するのはよくない。早めに立ち去ろう。

痙攣を止めた獣の処理はどうするか、と考えて死体を引っ張ってみたが私の体力ではどうにも動かすことが出来ない。獣に食べられていた人間のことも、この診療所の所有者に訊いてみようと思ったがいくら人を捜しても見つからなかった。

一度外に出て敷地内も調べてみたが、墓石の立つ庭は不気味な様相をしているだけでそこにも誰もいない。

古都ヤーナムは獣の病が蔓延する場所だ。それに伴って手当が間に合わずに亡くなった者が多いのだろう。

私が住んでいた場所では治療を目的とする施設の敷地内に墓地があるのは稀ではあったが存在していた。だがこのように治療を求めてやってくるであろう人たちの目に触れる玄関口に立っているというのは、古都ヤーナムでの病がどれだけ深刻なのかと物語っている。

なんとも言えない感情が湧く。

それが何かを考えるのが嫌で、ノコギリ鉋をガシヤリ、ガシヤリと変形させた。

診療所に踵を返して屋内に入る。

手頃な紙を一枚拝借し、そこに獣に食われた人の弔いを任せる旨を書く。

獣に関しては……いいだろう。

人としての理性を保てずに同族喰らいをした者は人ではない。正しく獣だ。

この人間に処理を任せよう。

亡くなった人に向けて簡易的に祈り上げたあと屋内を出て、高い塀に守られた庭に取り付けられた二つある門のうち一つに手をかける。

一つはどうあがいても開くことは無かった。……遠くから、何か巨大な者が歩くような音と振動が感じられたが気のせいだろうか？

…… …… 今の私は自分も不明慮で確かに信じる事が出来ない。もしかしたらそれは錯覚なのかもしれない。違和感を考えていても仕方が無い。

もう一つの方は重たいが開きそうだ。両手が塞がった状態では開くことが出来ず、私は少し躊躇をした後に足元に武器を置いて力を込めて門を開いていった。

ギリギリと少しずつ開いていく門。

それを完全に開いた頃には全身で息をする程だった。

あまりにも体力が無い。

これもどうにかしないといけないな。

足元の武器を拾い、門の外に足を踏み出す。

—— 赤く燃える夕日の色が視界に入ってきた。

…… 一体、どういうことだろうか。

この診療所は高い場所にあるようだ。

進んで真っ直ぐ、少しの階段を降りると下が望めるテラスのようなところに立つ。

転落防止のための柵の前で、日の終わりを告げる赤を見つめた。

私がこのヤーナムに足を踏み入れたのは夜だったはずだ。

一度夜が明けたのだろうか。

そうなるよこれは二度目の夜か。

私は随分と長い間眠っていたようだ。

………。

暖かい色に感じ入っていた。

こんなことをしている暇は無いな。

ふと横を見るとこと切れた人が柵に寄りかかっていた。

痛ましい。簡易的にだがその人間に向けて祈った。

現世で十分病に苦しんだであろう人が、せめて天上で暮らせるように。

テラスを上がり辺りを見回す。

重厚な作りの馬車が多く置かれている。

壊されているといった風でもなく、ここにはあまり多くの獣がい無いのだろうとあたりをつける。

慎重に歩を進めていくと、市街に入るらしい鉄製の大きな門があった。そこは流石に見ただけで分かる。人の手では開かないだろう。どこかに仕掛けがあるはずだが、と柵状の門の前に立ち奥を見るとレバーがあった。

アレか。ここからだと手が届きそうにないな。

他のところを探すか、と後ろを振り返ると遠くないところに松明を持った獣が走ってきていた。

人の形を保ち、衣服を着こんでいるがその異様な腕の長さや獣の目は誤魔化すことが出来ない。

もう片方の手には斧が掲げられ、敵だと認識しているのが明確な憎悪のこもった目で私を見据えている。

あれはもう駄目だろう。

私の父のように、せめて人の形があるうちに終わらせる必要がある。

なあ、と声をかける。あんたには理性があるのか、と訊ねてみたが、獣は私にどこかに行けと叫ぶばかりで話にならなかった。

……人語を弄する脳はまだあるんだ。ならあれはまだ人だろう。良かった。

常人よりも伸びた腕は間合いを狂わせる。

相手に背を向けないように注意して距離を取り、相手の出方を伺っ

た。

斧を振り下ろし私を殺そうとするソイツは、ぼやけた虹彩で私を見ている。

振り下ろした姿勢の時が攻め時か、と近付こうとするがそれを察知したソイツは松明を振り回して牽制する。

動きはあまり速くは無いが松明が厄介だな。

服に引火すると大火傷だ。

なら、と銃でソイツの胴体を撃ち抜く。

銃弾は身体を貫通せず、ソイツは少し怯んだ程度で再度私に襲い掛かってきた。

普通の人間なら蹲るぐらいはするだろうに。

どこかに行けと、この街から出て行けと、そう叫ぶソイツは私を確実に屠ろうと斧を振りかぶる。

スツとソイツの間合いに入る。妙に軽い身体は私の理想とした動きをこなしてくれる。ガキンツと斧が地面に届いた頃には私のノコギリ鉋がソイツの胴体を数度切り裂いていた。

苦鳴を漏らすソイツが近くににいる私に噛みつこうとしてくる。動作が獣染みている。

距離を取るとすぐさま松明で私を殴ろうとしてきた。その顔面に向けて銃弾をお見舞いする。

一、二、三、四、五、六。

銃の中に入っていた弾をすべて吐き出したにも関わらず、ソイツは顔面を押さえて呻くもののまだ生きていた。ノコギリ鉋を何度も振り下ろす。何度も裂く。何度も何度も、やめろ、たすけてくれと言われても何度も。

ソイツが地面に伏してあまりにも悲惨な姿を晒す頃には、私は身体で大きく息をしていた。

これは人ではない。

獣だ。人の形をしていたが同族である私を殺そうとしていた。

人の言葉を扱っていても獣となりかけていたのだ。

それを、私は、獣となりかけていた人を、人として死なせてやった

のだ。

助けを請われても、それは、それはきつと。

私の父と同じなのだ。父は絶望の底で、生きることよりも獣となることを嫌悪していた。

なら彼らもきつとそうなのだろう。自身が獣となりかけているのが分からずに生きようとするのは悪だろう。呪いを振りまく病原体だろう。

自身を人として錯覚したまま死ぬるのはなんと幸せなことか。

彼らは幸せだった。

獣という病に侵された自身を知ることが無いまま逝けたのだ。

幸せなことではないか。

火の臭いがする。燻った煤の臭い。焦げ臭い煙の臭い。

膝に手を付いて息をしていた身体を起こし、地面に伏しているソイツの手から松明を奪い取る。

そしてソイツの衣服に火をつけた。

火は浄化の象徴だ。

獣が混ざってしまった人。汚らわしい獣が浄化されることを願い、火に食わせる。

私は間違つてなどいない。

銃に弾薬を補充して腰にさし、松明とノコギリ鉋を持って次を探す。

先に進むと獣が進んだ人が倒れていた。そいつの近くに何かがあったので近寄ると、二人ほど立ち上がって私に襲い掛かってきた。

死体の振りもするのか。面倒だな。

近寄るソイツらに松明を振りかざし距離を取らせて体勢が整わないうちに近寄り切り付ける。

何度も裂く間に手がしびれてしまう。取り落とさないよう力を込めて振りかぶり、身体を裂いていく。

二人が地面に倒れ動かなくなるとまた火をつける。

…… …… …… 母を見つけたとしても、燃やさないとなあ。

息を切らせて、ぼんやりとする頭の隅で考えた。

火炎瓶を拾った。良いものを手に入れたものだ。

松明で直接衣服に火を点けるのは案外手間であるし、時間もかかる。だがこれなら投げつければ一気に浄化できるだろう。

今は松明があるからそちらを使いつつ、投擲する場合や松明が使い物にならなくなったときに使おうか。

…… 火打石が必要だな。それも探すか。

周囲に目ぼしいものが無いかと探しつつ、市街に入る方法を模索する。

あの鉄製の門を乗り越える、というのも考えたが私の体力ではずり落ちるのが分かっている。

いまだに燃え続けている獣たちの死体を避けつつ、門の出入り以外はヨセフカ診療所に行くしかない短な道を歩き、ふと頭上を見上げる。

右手に住宅街を見下ろす空間と、左手に見上げる建物の群がある。建物の側面にはしごらしきものを見つけ、その下にへと移動した。はしごは折りたたまれて頭上高くにある。屠った獣共はあのはしごを使っていたのだろうか。

はしごの下付近の建物の外壁を注意深く観察していると、細い柱の模様に紛れてレバーがあるのが分かった。それを操作すと頭上のはしごが音を立てて落ちて来た。地面に到達し動きを止めたのを見て、本来の機能を取り戻したはしごを上っていく。

カンカンカン、と私が立てる音だけが響く。安定した足場とはいえ垂直を上がり続けるのは疲れる。それに敵に相對するための武器も使えず、もし空を飛ぶ獣がいれば私は格好の的だろう。

それが分かっているので上がる速度をはやめた。

…… | ———— ? ? ? ? ? | ———— ツツ !!

人では到底出すことの出来ない、絶叫染みた甲高い振動が空気を

切り裂き響いた。

突然のことに思わず動きを止める。本能的な恐怖が、その声の主である何かに見付からないようにと身を縮こませた。

しばらくの時間、建物にへばりつく虫のように動きを止め感覚を研ぎ澄ませる。あたりに変化がないか注意深く見定め、何も起こらないことを確認して遅々とはしごを上がった。

無意識に掴む手に力を込めていたらしく、手を開くのが若干ぎこちない。

ようやく上り終わるとすぐさま距離を取り、はしごを振り返った。随分と高いところにきたようだ。変わらない夕暮れの色があり、陰影を刻んだ建物群を見渡せる。

古都ヤーナムは山間部にあることから必然的に坂道が多くなる。傾斜に沿うように建てられた家々をつぶさに観察する。喉を潰してもなお叫ぶ、産声に似た叫びはもう聴こえない。

……独特な甲高さだった。私が相対したことのある獣たちとは違う。悲鳴に近いのかもしれないが、分からない。ただ潰れた喉で叫ぶような甲高さで、空気を震わせるほどの音量があるということは、叫んだ本人は物理的に体の大きな何かであろうことは分かった。

夕日の赤をしばし眺めて気持ちを落ち着かせた後、私は先に進むために身を翻した。

私が今立っているのは、住宅街への道だった。

私は建物の外壁を上っているつもりだったがどうやら違ったようだ。はしごを上った先に一軒の家があった。

窓に吊るされた赤いランプから、思わず眉値を寄せる臭気が発せられている。あれは確か獣除けの香だったか。あんな酷い臭いのものを焚かなければいけないとは、おちおち換気も出来ないな。

明かりの付いている窓に近寄ると、中からゴホゴホと苦しそうに咳き込む音がした。人がいるようだ。人差し指の関節で窓をノックした。

家の中の住人はいきなりの物音に驚いたようで、一切の音が途絶える。

私はもう一度窓を叩いて声をかけた。

「あ、ああ……驚いた。獣狩りの方ですか」

男の声だ。呼吸器官が狭まった苦しそうな声。

ヤーナムに来て初めてまともに会話が出来るような住人に出会えたのは僥倖だ。

驚かせてしまったことを詫びて、友好的に会話をしようと試みた。

「あなたは……どうやら外からの方のようなようだ。私はギルバート。あなたと同じ、よそ者です」

私には名乗る名が無かったのでそれにも詫びる。

ギルバートは私の言葉に少し笑ったあとに「いえ、いいんですよ」と言った。

「色々とぐっ苦労が多いことでしょう。この街の住人は皆……陰気ですから。私は床に伏せり、もう立つこともままなりません、それでもお役に立てることがあれば、言ってくください」

何度も息継ぎをして言ったあと、ゴホゴホと咳き込む。

彼の発作が収まるまで待ち、耳を傾ける。

「……この街は呪われています。あなた、事情もおありでしょうができるだけ早く離れた方がいい。この街で何をしようとも、私には、それが人に良いものとは思えません」

そんなことは知っていた。この街が呪われていることも、ここで得られるものが無いことも。

私はギルバートに端的に母親を探していることを伝えた。母のことを知らないかと尋ねてみたが、彼はあまり外に出歩くことも無く人との交流もそれほど無いらしく、該当する人物に心当たりが無かったようだ。

獣狩りに出歩く狩人の知り合いなど一人もいないらしく、私は少し落胆したがまだ探し始めたばかりなので気を持ち直す。

ならば、と「青ざめた血」のことを尋ねてみた。

「青ざめた血、ですか……？ うーん……すみませんが聞いたことはありません」

そうか、と頷く。

血に乗る呪いが蔓延っているヤーナムでも知られていないものなのだろうか。

それともギルバートが知らないだけなのか。彼は少し考えた後に言った。

「ですがそれが特別な血であれば、訪ねるべきは医療教会でしょう。医療教会は、血の医療と、その特別な血の知識を独占していますからね」

医療教会。

それは母から聞いたことのあるものだ。

ギルバートは医療教会のある場所を教えてくれた。

ヤーナム市街から谷を挟んだ東側、聖堂街と呼ばれる医療教会の街があり、その聖堂街の最深部には古い大聖堂に医療教会の血の源がある。そういった噂を聞いたことがあるようだ。

「ヤーナムの街は、よそ者に何も明かしません。私が聞いたのも噂程度ですが……すみません。常であれば、あなたが近づくことも叶わないでしょうが……。獣狩りの夜です。今夜はむしろ、好機なのかもしれませんよ……」

ギルバートはさらに続けた。

常なら市街地を抜けた先にある大橋を渡ればすぐなのだが、獣狩りの夜は橋門は封鎖されるらしい。なら、ともう一つの行き方を教えてくれた。大橋を挟んで市街の南側に聖堂街にへと続く下水橋が架かっており、そこを進めば良いとのことだ。

言い終えると彼はさらに激しく咳き込む。

私は彼にお礼を言った。彼からの情報が無ければ私は闇雲に母を探すハメになっていただろう。目下の目標は聖堂街に赴き「青ざめた血」のことについて調べることか。母との関連性は分からないが、あのメモはなんだか気になる。あれは誰の字だったのだろうか。酷く憶えのあるクセのある字なのだが、一向に思い出せない。

母の亡骸を探すのが最優先事項ではあるが、酷く、酷く脳みそにこびりついて思考を振り払うことができない。血を、血を求めよとガリガリと脳みそが削られ啜られている恐ろしい幻覚を感じる。

痒いな。ガリガリと頭を搔き、そういえばと最後にギルバートに尋ねた。

先ほど聴こえた獣らしき絶叫になにか心当たりは無いだろうか。

「ああ……先ほどの……。いいえ、あんな、あんな恐ろしい声を聴いたのは初めてで……。今夜はいつもとは違うのかもかもしれません。……獣狩りの方、あなたはそれでも、行くのですか？」

そうだ、と答える。

ギルバートはごほごほと咳き込んだ後に私の身を案じる言葉を口ずさむ。

私はそれを素直に受け取り、窓から離れる。

ヤーナム市街に入るであろう道は二つ。

うち一つには格子の門がそびえ、こちら側からは開かないようだ。

もう一つはギルバートの家から下るように続く道であり、私はそこらを道なりに進んでいった。

土嚢や荷物が道の端に置かれており、鎖のかけられた棺桶が無造作に壁に立て掛けられている。風が建物の隙間を通る音と、石畳を踏みしめる自身の靴音。手に持った松明の火がはじける音だけが聴こえ、人の営みの声は一切無い。薄気味悪い街並みを歩き、住宅街の上にかかる橋の上をゆっくりと歩く。

周囲に何もいないか慎重に探りつつ、道を塞ぐように置かれた土嚢や樽に近付く。何かの進行を防ぐために置かれたものだろう。私はそれらを迂回するように移動した。

瞬間、置かれた樽が大きな音を立てて勢いよく私の方にへと倒れてきた。

思わず顔を庇うように右手をあげ、身体全体に衝撃が襲う。予想していなかった事になすすべも無く地面に倒れ、盛大に背中を打ち付けて息を詰まらせる。

骨が軋んだ。ガヒツと無様に肺から空気が漏れ、痛みに呻く。

身体を何かが貫いた。

……？

私は自身の胸に生える鉈に疑問を覚えた。

血に塗れた鉈を伝い、持ち手、その先にへと視線を移す。

「でていけ」

歪んだ虹彩で私を睨む男がいた。

「ここはおれたちのまちだ」

人の形をしているくせに酷く獰猛に唸り、興奮のためか獣のように息を荒くする。

男は鉈を引き抜き、再度振り下ろしてきた。

「かつてになんて、させるものか」

引き抜き、振り下ろす。

「すべて、おまえらのせいだ」

何度も引き抜き振り下ろす。恨みのこもった刃は何度も何度も私を切り裂く。

痛みが飽和している。熱い、全てが熱い。喉を血が遡り、ごぼりと吐き出す。

嫌だ。

「おれたちのまちだ」

嫌だ。死にたくない。

「おまえらが、かぞくを」

嫌だ、嫌だ。私はまだ母を見つけていない。母を、父の下に。

「おれのかぞくを、おれの、おれの」

死にたくない。

今持てる力を振り絞って松明を叩きつける——叩きつけようとした。

私の腕はもうぴくりとも動かない。痙攣するばかりだ。血を吐き出し、血を垂れ流し、肉を抉り返され道に全てをまき散らしていく。

蛆が、私の身体から蛆がころりと腹を見せて這い出してきた。

怖い。寒い。

熱かったはずの身体が急激に冷めていく。視界が暗くなっていく。眠りたくない。怖い、嫌だ。

「のろわれろ」

ガツガツと衝撃が襲う。

何度も跳ねる。あ、あ、ああああ、

、

ひかりが、よぎったきがした。

息を吸う。

いつの間にか閉じていた目を開き、顔を上げた。

木造の四角い部屋の真ん中で座り込んでいたようで、私は困惑のまま辺りを見回した。

見たことのある長椅子、記憶に新しい床の捲れた木板。正面の通路はあの獣がいた部屋だろう。立ち上がって後ろを見ると上にへと上がる階段があり、次の部屋への扉が閉ざされているのが見えた。

私が今いる場所はヨセフカ診療所だ。

ぼんやりと階段上の扉を見つめて、私は先ほどの恐怖を思い描いた。

獣になりかけた人間もどきが大振りの鉈を振り上げて私の身体を何度も抉り肉を掻きだす姿を、あの憎しみに彩られた表情で怨嗟を吐く姿を、私は見たはずだった。

あれは実際にあつたことなのだろうか。

不思議なことに、夢の中の出来事だったように現実味が無い。

感じていたはずの痛みを思い出せるのだが、それが私の身に実際に起こったことなのか確証が持てない。切り裂かれたはずの自身の身体を確認する。どこにも怪我は無く、さらには服に血の汚れも無かった。

憎しみに当てられて恐怖をしたはずなのに、死ぬことへの恐怖を感じていたはずなのに、それが本当にあつたことなのか私には分からなかった。

あれは夢だったのだろうか。

あんなに臨場感溢れる現実と相違ない夢を見たのは初めてだ。

夢の中の私は恐怖をしていたが、今の私は何も感じずにぼんやりと呆けている。

血の臭いも、火の臭いも、人の声も、全てを覚えているというのに、自分が自分ではないみたいだ。

自身の胸に置いていた手を下ろして、私は床に落としていた武器を

拾った。

銃の中にはきちんと弾が入っている。ポーチの中も確認して、驚きに目を見開いた。ポーチの中の弾数は七発分減っていた。それは、このヨセフカ診療所を出てすぐに屠った人間もどきに叩き込んだ数だ。さらに火炎瓶もベルトに紐で吊るされていて、私はあれらが現実で起きたことであることを認識する。

あれが現実で起きたことだったのなら、私は死んでいるはずだ。なのに何故私はここにいるのだろうか。

自身の知っている常識から逸脱している事柄に理解が追いつかない。頭の中をこねくり回して納得のいく理由を作り出そうとするが全て空回りに終わる。当たり前だろう。人は、いや生き物は死ねば皆終わりなのだ。死者が生き返ることなど御伽噺の中でも奇跡に部類するものなのだ。夢物語の奇跡など、現実では不可能であり有り得ないことなのだ。それなのに何故私はここにいるのだろうか。

本当に何も変わったところは無いのかと身体を調べる。

どこかが腐っていたり心臓が無かったりはしないだろうか。

醜悪な儀式により生み出されるゾンビーが頭を過ぎり、私は衣服を脱いで細部まで確認をした。

結果は、身体的にはなんの変化も無い、だった。

不健康な細い手足、薄い胸板、腕の肘の内側には注射痕があり、他に怪我も無くどこも腐ったりはしていない。変な模様が増えていたりもしない。

私はひとまず安堵の息を吐いた。

次いで、こんなところで衣服をほぼ剥ぎ取った姿でいることに羞恥を思い出す。

すぐに衣服を着込んで両手に武器を持ち直した。

持っていたはずの松明が無かったので左手には銃を持つ。

何度か握りしめたりトリガーに指を置いて指の動作の確認をした。とりあえず、私の身に何が起こったのかは分からないが私は生きている。

なら私は行動を起こすことができるし、母を探すこともできる。

ふうと小さく息を吐いて階段の上を見上げた。

少し気になったのだが、あそこは元々閉じていただろうか。確かあそこは私が最初に目覚めた部屋だったはずだ。もしかしてこの人間が帰ってきたのだろうか。

階段を上がって扉の前に立つ。扉の向こうから何かが動く気配がした。

私は一声かけて扉を開こう取っ手を捻るが、鍵がかかっているのか開くことは無かった。

扉の向こうから息を呑む音が聴こえ、そして私が人であることを知ると「ああ、ごめんなさい」と嘆くような女性の声が響いた。

「この扉を開くことはできないわ。どなたかは存じませんが、この診療所をあずかる者として、大事な患者さん達を感染の危険にさらすことはできないの。ここに助けを求めに来たのなら私にはもう……。

……あら……この香りは……もしかして、獣狩りの方、かしら……？」
懺悔するように切々と話していた女性は、何かに気付いたように声を潜めた。

かろうじて拾えた言葉に私は肯定の返事を返す。

扉の向こうの女性は少しの間沈黙をした後にもう一度謝罪した。

「そう……だったの。でも、ごめんなさい。先ほども言った通りこの扉を開くことはできないわ。街のために狩りに出るあなたには申し訳ないのだけど……ああ、そうね。獣狩りの方なら……いえ、狩人の方なら、これをお渡しできるわね……」

そう言つて女性が扉から離れて、戸棚を開く音が聴こえた。そして戻ってきた彼女は、一部ガラスが割れた部分からほっそりとした手を出してきた。その白い手の平には黄色い小さな瓶が乗っていて、私はそれが何か分からずに問いかけた。

「これは私が作った輸血液。獣狩りは大変危険な仕事だわ。命を落とすことだってある。怪我をして大量の血液を失った時、これを飲んでもらえればあなたの血液の代わりになってくれるわ」

命を落とす。

それは私が先ほど経験した事だった。

私は彼女にお礼を言つてそれを手に取つた。

私の手のひらに収まる小さな瓶の中には得たいの知れない黄色い液体が入っていた。

目の前で揺らして中身を確認する。黄色というより飴色と言つてもいい。水菓子を思い出して懐かしさに目を細めた。その輸血液を懐に仕舞い、私はここに置いていつた遺体と獣の残骸のことを話す。彼女はさきほど自身のことを「この診療所をあずかる者」と言つた。なら言うべきだ。

「……そう、なの……。その方はおそらく治療求めて来られた方でしょう。分かりました。あなたが行つた後に埋葬しておくわ」

私の力では獣を運べない。そつちの処理も任せていいだろうか。

「ええ。そちらも埋葬しておくわ」

……人を埋葬するのなら分かるが、獣まで同じ扱いをする女性に顔を歪める。

彼女は扉越しで私の表情の変化に気付かないだろう。

ああそういえば、とふと疑問に思ったことがあつた。私はこの扉の先で目を覚ました。肘の内側に注射痕が多く残る私の腕に、何かをさされたのだろうか。私に何かをしたのは彼女なのだろうか。

「……いえ……。あなたのことは存じ上げないわ。誰かが勝手にここを使つたのかしら……」

そうか。それは嫌なことを聞いた。

なら「青ざめた血」のことを何か知らないだろうか。

「……いえ、知らないわ」

そうか。残念だ。

やはり医療教会を訪ねた方が良さそうだ。

私は彼女に礼を言つて立ち去ろうとしたが呼び止められた。

「狩りに出かけられるのね。なら、少しお願いがあるの。ここに来ようとしている人がいたら止めて。ええ、でももし、もし……。それでも救いを求める人がいたら……。いえ……」

女性はひどく迷っているようだった。

数瞬の葛藤を経て、それでも何も言えずに否定の言葉を何度も重ね

る。

「私はヨセフカ。私の名前は街の人たちにも知られているはずだから、私が来ないでと言っていたと伝えて欲しいの。それで、大丈夫なはずだから……」

彼女——ヨセフカはそう言っただけで息を吐いた。

「呼び止めてしまっただけで申し訳ないわ。では、これで……。狩りの成就を、祈っています」

ヨセフカは扉の前から離れていった。

私はその扉をしばらくの間見つめていた。

……

彼女は、何もできない状況を嘆いているのだろうか。

獣が蔓延る現状に対して明るい気分にはなれないだろう。

彼女の口ぶりからするとこの先には患者がいるのだろう。彼女は医療者らしく彼ら彼女らに感染から守っているのだ。これ以上にもできないと理解してしまっただけで、だがそれでも救いを求める患者を助けないという気持ちとの葛藤でああいう歯切れの悪い物言いをしたのか。

これはただの私の推測に過ぎない。

考えても無意味だ。これ以上はよそう。

階段を下りて部屋を横断する。

二つの死体はまだそこにあった。

……死体があるということは、あれはやはり現実のことだったのか。

私が覚えている通りの死体の有様だ。状態も位置も変わりなく、時間もそれほど経っていないのだろう。

なら私が死んだことも現実だった？

分からない。

二つの死体を横目に、二度目のヨセフカ診療所を出た。

理解が追い付かない、驚くべきことが起こった。

ヨセフカ診療所を後にした私は開いた門を通ってギルバートの家まで行こうとした。

そう、ヨセフカ診療所の前庭にある二つあるうちの一つ、体全体を使って開いた重たい門は確かに開いていた。私が開けた記憶があるし、それに診療所の中に死体が二つあったことから私が経験したことは現実であるはずのことだった。証明がされているというのに、美しい夕日に感じ入り惚けたことを覚えているというのに、ソイツは私を見つけると「でていけ！」と松明を振り回してきた。

ソイツは、私が確かに顔面に銃弾を叩き込んだはずの獣になりかけた男だった。

目の前に迫ってきた男から距離を取り、動揺のままソイツに問いかける。

何故生きています？

ぼやけた虹彩が奇妙に光った気がした。ソイツは怒りの雄叫びをあげて私を殺そうとする。私は動揺していた。ノコギリ鉋を振るうことなく距離を取り続け、目の前の相手をどうするかと判断を決めかねた。

生き返ったのか？ 私みたいに？ なら、とソイツに再度問いかける。

お前は一度死んだのか。

ソイツは怒りで相貌を醜く歪めて斧を上段から振り下ろした。

上から振り下ろされる得物に、私が死んだ際の記憶が呼び起こされて大袈裟に飛び退いて避ける。

「かえせ!! ゆうじんを! おれたちのまちをかえせ!!」

その言葉にさらに動揺する。

それは何かを失った人間の叫びの声だ。

心の底から相手を憎悪し嘆き悲しむ者の声だ。

……… 性質が悪い。

確かに彼らにも人の心が残っているのかもしれない。だが、彼らを生かすわけにはいかないのだ。血の呪いを垂れ流す彼らを浄化しないとならない。そうしないと私の父のような人が現れる。私は父の無念を晴らし、父が望んだように彼らにも等しく人として生を終わらせたいのだ。

私は決断した。

逃げ続ける私にソイツは苛立ち攻撃が大振りになる。

私はソイツの行動を注意深く観察し、銃を握りしめた。

ソイツが一際大きく斧を振り回した瞬間、私はソイツの胴体に向けて銃を放った。

胴体を守るものは無い、大きく開いた胸に向けて撃たれたそれは丁度心臓の位置に着弾し、その衝撃にソイツがよろける。私はすぐさまソイツに近寄ってまだ体勢を整えていないソイツのハラワタに手を差し込んだ。

——私の非力なはずの手が男の背面から這い出て来る。

赤く彩られた私の手。指を曲げて、勢いよく引き抜く。指に引っかけた引き摺りだされた臓物が地面に飛び散り、男は呆然とした表情で武器を取り落とし腹を抱えて崩れ落ちた。膝立ちになってガクガクと耐えていたが、自身の中の物が地面に落ちているのが信じられないのか浅く息を繰り返し、そしてそのまま血の海に顔を突っ込んだ。

その男はまだ生きていたようだった。

悲鳴をあげるでもなく苦痛に耐える姿は痛々しい。

私は何も人に苦痛を与えたいわけではないのだ。

男に、人として生を終わらせられるであろう彼に慈悲を与えることにした。

ノコギリ鉋をソイツの首に沿えて勢いよく引く。私の力では一回で切断は出来なかった。

咽返るほどの血臭。息を止めてもう一度力を込めてノコギリを戻す。まだ切断できない。引く。まだだ。戻す。骨に当たってしまった。引く、戻す。引く、戻す……。

ソイツは特に抵抗することなく受け入れた。

骨を上手く断ち切ることができず、業を煮やして首の骨に向けてノコギリを振り下ろして叩き切った。ようやく切断が出来た。その頃には首は半ばまで千切れていて荒い傷口からとめどなく血をまき散らすだけになっていた。男の命はもう途絶えていた。私は重労働に大きく息を切らし、ソイツが持っていた松明を拾った。

松明を持つて私は考える。……燃やすか？

一回目は彼の魂から獣が消えるようにと願って焼いたが、今現実とその男は獣になりかけた姿で私の目の前にいた。もう事切れてはいないが、彼から獣は褪えなかつた。もう一度焼いたとして、彼の冥福を祈ったとしてまた同じことの繰り返しなのではないか？

しばらくの間、首からとめどなく血を垂れ流す男の傍らに立ち考える。

…… 何度でも彼らの冥福を祈ろう。

私は彼を燃やすことにした。

血に塗れているので燃やすのに難儀したがどうにか全身に浄化の炎を纏わすことができた。

肉が焼け、脂が溶け、血が火にあぶられる生臭い香り。

好んで嗅いでいたいものではない。

周辺に火が燃え移りそうなものが無いのを確認して先に進んだ。市街への門は相変わらず閉じているのでまたはしごを上ることにする。はしごは私が操作しなくてももう下りていて本来の機能を果たしていた。……ああそうだ。そういえば火炎瓶を拾ったところにもう二人、獣になりかけた者がいたな。それを思い出してそちらに近付くと死んだふりをしていた男二人が立ち上がる。

その男たちと対峙したのはこれで二度目だ。なんとなくだが次にどういった行動をするのか、少しだけ予想ができた。私は彼らに背を向けて走り出し、一人が私の背に追い縋ってくる。得物を大きく振り上げて私を殺そうとする。

すぐに振り返って得物を銃の側面ではじき、がら空きになった胴体に向けてノコギリ鉋を袈裟切りに振り下ろす。相手がよろめく。追いつ打ちに銃弾を撃ち込み、倒れたのを無視しもう一人の顔面に銃弾を

撃ち込む。怯んだところに近寄り、首を狙ってノコギリ鉋を横に振り抜いた。だが私の狙いが甘かったらしく肩を切り付ける形となってしまった。……今度から部位を狙うのはよした方が良いのかもしれない。

だが顔面なら、この距離なら狙える。顔面に向けてノコギリ鉋を振るい、ソイツの目を潰す。絶叫があがった。

その頃には地面に倒れていた男も立ち上がっていて、私に怒りの声をあげて襲い掛かってきた。

私はソイツに向けて火炎瓶を投げつける。残念ながら火が点いていなかったので燃え上がらなかったが、男は油の臭いに驚いて私から距離を取った。

目を潰された男は悲鳴をあげてがむしやらに武器を振り回している。ソイツに向けて銃弾を撃ち込み怯ませ、ソイツの手に握られている松明を強奪して、火炎瓶の油を被った男に向けて放り投げる。

——男は燃え上がり、自身の身体を舐める火を消そうと踊り始めた。

私は少し笑ってしまった。

獣が火を嫌がっている。

良いことだ。

目を潰した男にノコギリ鉋を振り下ろし、何度も傷つける。その男が動かなくなるまで切り付け、終わった頃に火だるまになった男にも目を向ける。その場に立っているのは私だけだった。

浄化を終えてはしごを上がり、ギルバートの住居の前に来た。

臭い獣避けの香が吊るされている窓に近寄り、コンコンと窓を叩く。

ギルバートは少し驚いた後に「先ほどの……獣狩りの方ですか」と言った。

その言葉だけで私が確かめたかったことが達成された。

しばし考え、私は彼に「私が先ほど訪ねた時からどれぐらいの時が経っているか」を訊ねた。

ギルバートは不思議そうな声色で十数分前だと答えた。
なるほど。私は納得して彼に礼を言っただけを離れた。
まるで、悪い夢の中に迷い込んだような気分だ。

大部分は私の記憶通りに起こったことが現実にいる。だが獣になりかけた男たちは夢の中の住人のように、死んだのだからそこに在るのはおかしいのに、そこに現れるのが当然だとばかりに現実にそこに在った。

獣だけがこの不可解な現状の枠から外れているのか？

だがそう考えようにもヨセフカ診療所に横たわる獣の存在がその考えを邪魔をする。

完全に獣になった者は現実に即するのだろうか。おかしいのは獣になりかけた男たちの方か？ ああだがそれなら私はどうだ。私もおかしいことになってしまふ。分からない。まったくもって理解ができない。

もういい。このことを考えるのはよそう。

私はギルバートの住居から市街にへと降りる道を進んでいく。

前と同じように静かな空気がある。進行を妨げる土嚢や樽が並び、鎖がかかった棺桶が壁に立て掛けられている。今回の私は松明を所持していないので、入り組んだ建物の隙間を縫って抜ける風の音と慎重に音を立てないようにして進む私の微かな靴音だけが聴こえる。

住居の上にかかる小さな石造りの橋を渡り終え、前回私が殺された

場所に到達した。

改めて見ると不自然な樽の積み方だ。

木箱の上に樽が乗せられ明らかに不安定な置き方をされている。向こう側に人がいることを悟られないようにだろうか、土嚢が積まれて完全に人の姿は隠れていた。

何かが来たら樽を倒し、動きが鈍ったところを仕留める。実際に体験したことなのでそれが非常に効果的なのが分かる。進行を妨げるように閉じられた門であったり積まれた土嚢などのバリケードの多さを鑑みるにヤーナムの人間は何かを恐れている。あるいは憎悪か。

私に向けられる憎悪や殺意を考えると彼らが恐れているのは狩人だろう。

家族、友人の死を悼む者たちの声を聴くのは心痛いがやらなければならない。

私はゆっくりと音を立てないように歩き、バリケードの側面にへと進んだ。人が入れる隙間の前で足を止め、呼吸を整える。手に持ったノコギリ鉋を確かめるように握り、私は一気に樽の後ろにへと躍り出した。

樽の後ろには前回見た通りの男がいた。驚きに目を見開き、だがすぐに私を寄せ付けないように鉋をがむしやらに振るう。特攻をかけるつもりでノコギリ鉋を振るっていたので武器同士がぶつかり合い互いに弾かれた。

大きく仰け反り、びりびりと手に衝撃が残る。

お互いに後退して体勢を整えるが、先に相手が復帰し雄叫びをあげて切りかかってきた。

とつさに銃を前に出して撃つ。

狙いをつけていなかった銃弾は相手の喉元に着弾し、ソイツは喉を押さえて後退った。

普通の人間相手だったなら銃弾が喉に当たれば死ぬというのに、ソイツはまだ生きて憎悪の目を私に向けていた。

——— 本当に性質が悪い。

人間の見た目をしているくせにその内に秘めるのは獣性であり人

ならざる者。ああ、憎たらしい。獣の血が憎い。呪いを、人の心を虜りしやぶり尽くすその怨霊の如き呪いが憎い。

死ね、死ね、生きるな。ここは人が生きる場所だ。お前のような獣が生きていていいわけがない。死ね、死ね、死ね、死ね、死ね。

燃え滾る憎悪のままノコギリ鉋を振るう。ソイツの顔面をノコギリが削ぎ、小さな悲鳴があがる。獣が悲鳴をあげている。良いことだ。勢いのまま相手を切り刻み続け、ソイツがようやく動かなくなつたところで手を止めた。

息があがっている。

あまりにも体力が無い。骨と皮だけの身で仕方が無いのかもしれないが、これではいつか詰まってしまうだろう。もっと力がある。獣を屠る力と技術がある。

私は荒い息のまま火を探す。

どこかに探しに行こうとしたその時、近くの短い階段の下から新たな住人が走ってきた。

どうやら銃声を聞きつけてきたようだ。

私の足元に転がる死体を見咎めたソイツは怒声をあげて鎌を振りあげ階段を上がってくる。

息が整っていないというのに面倒なやつらだ。増援が来たらしく粗末な木盾を持った男も現れ、ソイツが持っている松明に目を細めた。あちらから火を持ってきてるとは僥倖だ。

怒りに任せて振るわれる鉋は読みづらく難儀だが、なんとなく戦い方のコツを掴めてきた気がする。

私は振るわれる鎌を無視してソイツの胴体に軽くノコギリ鉋を振るった。するとソイツは慌ててガードをしようと武器を引き寄せる。目論見通りの動きにノコギリ鉋に力を込める。慌てて防御に転じたものだからそこには力はあまり込められていないはずだ。相手の鎌を弾き、手に衝撃が来るがそのままソイツの身体に横一直線の傷を負わせた。

驚くソイツにさらに近寄り、押す。そのまま階段の下にへと落ち、その下にいた松明を持った男を巻き込んで転倒した。

あとは相手が体勢を整える前に切り刻むだけだ。

ああ、だが先ほどの男のように防御反応から鎌を振り回されたら厄介だ。

私はすぐに踵を返してバリケードの前にへと移動する。そして不安定に積まれた樽に体当たりをして崩し、階段下にへと落とした。盛大な音を立てて落ちていき、その音を追うように私もソイツらにへと接近する。

松明を持った男が自身や木樽に火が燃え移らないようにと苦心をしながら、鎌を持った男も雪崩てくる樽に注意が向いていた。ソイツらが樽を押しつけた瞬間にノコギリ鉋に体重を乗せ、渾身の力で振るった。

血が飛び散る。あとはソイツらに攻撃の隙を与えないように切り刻むだけ。

何度もノコギリ鉋を振るい、悲鳴も命乞いも無視して何度も振るう。

息が苦しい。だがここで止めたら死ぬのは私だ。

骨が折れそうな感覚に歯を食いしばり肉を削いでいく。

ようやくソイツらが死んだことを確信できた頃には私は身体で大きく息をしてその場に座り込んでいた。

酸欠でぶるぶると手が震え、銃とノコギリ鉋を握る手を開くことができない。

身体が重い。

狩人衣装は血に塗れ、それがさらに重く感じる。

普通の服よりも水分を弾く素材なのだが、下に着込んだシャツにまで血が付着しているので不快感がある。

階段の半ばで座り込み、壁に身を寄せてしばらくの間休憩を取る。

息は整ってきたものの身体の重さは変わらず、私は立ち上がることでできなかつた。

無残に切り刻まれた死体二つをぼんやりと眺め、地面に落ちた松明に早くコイツらを燃やさないか、という気持ちが沸きあがる。だが身体は動かない。武器を持った腕が非常に重く感じる。

どうしようか、とぼんやりと考えている間に松明の火が樽に引火してジリジリと燃え上がった。

…… …… ちようどいい。これで死体を燃やす手間が省ける。そう思いつつ、次に次にへと燃え広がっていく様を眺めていた。

火が移った樽の付近にはそう多くはないもののまだ燃え移りそうなものもある。

早くここから離れないと私も巻き込まれてしまうだろう。

そのことが分かっていたので、私は怠い身体をなんとか反転し、一段一段這うようにして上がっていく。ああ、腕を持ち上げるのだけでも怠い。頭に霞が掛かったように思考が鈍っている。

人間ではない何かになった気分だ。前に、前にと手を伸ばしずると身体を引き上げる。

何度目か手を伸ばした時に、——視界に誰かの白い手の平が映った。

私は驚いて階段上に目をやる。

「狩人さま、どうかされましたか？」

そこにはどこかで見たことのある女がいた。

この血塗られた場所に不釣り合いな程、古めかしくも清廉な雰囲気纏った女だ。

その女は私に向かって手を差し伸べていた。腰を折り、私を待つように手を差し出し続けている。

驚きに身を固くしていた私だが、あまりの非現実さに呆けて、だが憎悪も殺意も向けられない事に安堵した。

手が開かない。銃を固く握りしめたままの手を、導かれるように彼女の手の上に乗せた。

その女性の手はひどく冷たかった。

硬質的な感触があり、私はその女性が人ではないことを瞬時に悟った。

白い花に囲まれ、私の手を取る女性は無表情のまま私を引き上げる。

ずるりと妙な感覚がした気がした。

私が気付いた頃にはそこは私が先ほどまでいた場所ではなく、白い花が植えられた花壇が並んだどこかの家の庭に、私は立っていた。

引き上げられた体勢のまま呆けて彼女の顔を見つめる。

人ではないであろう彼女は無表情で私を眺めていて、何も行動を起こさない私に疑問を抱いたのか首を傾げた。

「狩人さま？」

澄んだ声だ。この声をどこかで聴いたことがあるような気がするが、思い出せない。

もしかして彼女は私の知り合いなのだろうか。

そう問いかけると彼女は再度首を傾げて「私のことを覚えておられないのですか？」と言った。

苦い思いが走る。私は素直に謝罪の言葉を告げた。

彼女は一言「そうですか」と無感情に言い、今まで握っていた私の手を離して一歩後ろに引いて深々と頭を下げた。

「はじめまして。狩人さま。私は人形。この夢であなたのお世話をするものです。狩人さま。血の遺志を求めてください。私がそれを、普く遺志を、あなたの力といたしましょう。獣を狩り……そして何よりも、あなたの意志のためにどうか私をお使ってください」

彼女の言葉にさらに困惑した。

あの冷たく無機質の硬さを持つ手に触れた時に人ではないだろうとは思ったがまさか本当に人ではないとは。私は頭を下げる彼女に頭を上げてくれと頼み込む。人形である彼女はゆっくりと上体を起こすと再度私に声をかけてきた。

「狩人さま、そのままではお辛いでしょう。あなたが抱え込んだそれらをどうなされますか」

彼女が何を言っているか分からない。

私が抱え込んだものとは何の事を言っているのか。

この身体の内側を犯す蛆のことだろうか。それなら何故彼女はそのことを知っているのか。

……いや、私は彼女のことを覚えていないのだ。忘れてしまった。

私はもしかしたら彼女と親しかったのだろうか。この身の内に巢

食う病のことを打ち明けるほどに。

蛆の病が私の身体を食い荒らす狂おしい時間の間、私は誰も信用することはせずただ一人、痛みで増幅される憎しみに臓腑を焦がしていた。その中で誰かに、彼女には打ち明けていたのだろうか。

私は再度問いかけた。あなたと私はいつどこで知り合ったのだろうか。

「夢の中です」

………

ああ、なるほど。

彼女の言葉に納得する。

確かに彼女は非現実的な存在だ。

そうか。夢の中で出会ったのなら、目覚めた時に忘れてしまうのは当然のことだろう。

私は落胆すると共に安堵した。

ヤーンナムで目覚めてから不自然な記憶の欠落がある恐怖とは別の問題だったのだ。

人形にここは夢の中なのかと問いかけると彼女は「そうです」と答えた。夢か。ならこの場所もそう重要なところではないのだろう。

少し見回しただけでも植物や花があり、死者と生者を慰めるための墓石が等間隔に並んでいる光景。

作られた当初は整然と並んでいたであろう石畳は捲かれて下の地面を剥き出しにし、続く石階段はこの付近に唯一ある古びた小さな館に伸びている。

血なまぐさい現実とは別次元の場所だ。

夢の中と言われて納得する静けさがあり、どこからも悲鳴が聴こえない。

風が吹き抜ける悲鳴も、かきりと踏みしめる悲鳴も、この耳が拾うのは人形が動く音と生温い空気の音だけだ。何も私を煩わせるものは無い。

そう思ったのに、血臭を鼻が嗅ぎ取ったことで皺を寄せる。

自身を見下ろすと私の身は血で塗れていた。手は血で覆い尽くさ

れ、握っていた武器の持ち手も黒ずんだ血で塗り固められている。全身に浴びた血や肉片がべたべたと服にへばりつきそれらが悪臭を放っていた。

手の平で表面を拭うと脂が纏わりついてくる。

不愉快だ。

「狩人さま、御手を」

人形は私の前で跪いて両手を差し出している。

彼女が一体何をしたいのか分からない。

だが、どうせこれは夢の中なのだ。深く考える必要も無いのだろう。

言われるがまま彼女に血に塗れた手を差し出す。

「獣狩りの夜を歩き続けるのでしよう。狩人さま、あなたは何を求められますか」

私の手に触れることなく両手で包み込むようにする人形の言葉に、私は真っ先に心を鈍らせることを求めた。私は弱い。肉体的にも精神的にも、あまりにも弱い。私が屠る獣たちは、まだ人の心を残している。私はそれが憐れに思えて仕方が無い。彼らの言葉に惑わされ、いちいち心をかき乱される。心からの言葉に揺さぶられてしまう。

それでは駄目だ。あの街が一体どういったところなのかは分からない。だがこれからも、母を見つけるまでああいう獣たちは数多くいるだろう。私はそれらをすべて救いたく思う。この脆弱な身体でどこまでいけるかは分からない。もし無理なら母のことを優先して彼らのことを放っておくかもしれない。

それでも、父のように心で泣き叫ぶ彼らのことを放っておくのは、私には苦痛を伴うことだ。

馬鹿らしい。あれらは父ではない。父はもう死んでしまった。だが彼らの声に父の最期を重ねてしまう。私が、私が父を救わなければ。

何も感じなければ。

ただただ彼らの冥福を祈れるだけの心があれば。

私は歩き続けることができるだろう。

「分かりました。目を閉じていてください」

言われた通りに目を閉じる。

ぞわぞわと何かが這う。ぞわぞわと何かが蠢く。

私はそれが蛆であることを確信する。

這いまわっている。私の身体を好き勝手にしゃぶり尽くしている。

痛みは無い。その蛆の存在を認識するたびに子供のよう泣き叫びたくなる。

怖いと、私はどうなってしまうのかと泣きわめき、父を思い出せる確たるものに懐かしさと共に咽び泣いて。

荒れ狂う感情にびくびくと瞼が震える。目を閉じていられない。

私は目を開いて彼女の両手から手を引き抜いた。

人形は跪いた状態で私を真つ直ぐに見ている。

「……もう、終わりました」

そう言うと、人形はゆっくりと立ち上がった。

私はなぜだかここから逃げ出したい気分になった。

口早にここから出る方法を人形に尋ねると、彼女は一つの墓石を手で示した。

「そちらで、あなたが行きたい場所を思い描いてください。そこに使者たちが目印となる灯火を掲げます。小さな彼らは、あなたの傍で常に支えてくれるでしょう」

やはり彼女の言っていることは分からない。

夢の中というのは不可思議な規律で動いているものだが、その規律を知らないこちらからすれば全て虚言のように聞こえてしまう。私はよく分からないながらもすぐに墓石の前に行き、場所を思い浮かべる。

ギルバートの家の前だ。

あそこならヤーナムの住人たちがいるかどうかすぐに判断ができるし、ギルバートに話しかければ夢か現実か確認することもできるだろう。

あの臭い獣避けの香を思い出し、外観を思い浮かべ、器官の狭まった咳の音を幻聴する。

「……あなたの目覚めが、有意なものでありますように」

目を開いて顔を上げる。

頭の中は明瞭だ。

折られたまれた身体をゆっくりと起こし、立ち上がる。

空気の流れる音とその不可視が私の周りを纏わりつく感覚があり、私が今いる場所がギルバートの住居の前であることを確認する。不愉快に思われる酷い臭気の香を目で追い、赤い光を宿すカンテラの下、窓から聞きなれた咳の音がしてそちらに近寄る。

その窓を指の第二関節で叩く。何度も済まないが、と声をかけると

「ああ、先ほどの……獣狩りの方」と知った声が出た。

人の声。人の言葉。私に敵意を向けるでもなく、得たいの知れないものでもない。

私が知りうる限り普通である人間の言葉と声。

伝えるのを忘れていたのだがと言い、ヨセフカが言っていたことをギルバートに伝えた。

「ああ……そうですか。それをわざわざ？　　はは、あなたは……少し、人を気にかけてすぎるのではないですか？　　……いや、……ヤーナムの人間が排他的なのでしょう。私も……知らず知らずのうちに、毒されていたようだ……。はは、分かりました。彼女のところには……行きませんよ……獣狩りの方、お気をつけて……」

ギルバートの言葉に礼を言う。

ああそうだ、もう一つ訊きたいことがあったんだった。

私が彼のところに訪れてからどれくらいの間が経っているのだろうか。

「……？　　十数分前、ですよ」

私は再度礼を言つてその場から離れた。

市街地に降りるための道を歩き、見慣れた土嚢や壁に立て掛けられた棺桶を素通りし、短な橋の上を足音を立てないように慎重に進む。私の視界に不自然に積まれた木箱や樽の壁が入り込み、手に持ったノコギリ鉋を確かめるように握りしめる。

バリケードの正面、少し離れたところに立ち細く深呼吸をする。終えると足に力を込めて走り出し木箱や樽に体当たりをした。

盛大な音を立てて向こう側に崩れていくバリケード。何個かこちら側に落ちてきたが幸い私に当たるとは無かった。

近くから樽が肉に当たる鈍い音とくぐもった悲鳴が聴こえた。

樽の雪崩が収まるのを待ち、階段の下に転がり落ちていく様を眺めて木箱に乗り上げる。尻もちをついて驚いた顔でこちらを見る獣を確認し、ノコギリ鉋を振り上げてソイツに飛びかかった。

ソイツは自分の武器を探すように目を私から離れた。ノコギリ鉋はソイツの顔面、胸元を大きく切り裂く。赤い血が飛び散り私を汚す。ソイツは痛みに小さく悲鳴を上げて顔を庇った。庇った腕に向けて再度ノコギリ鉋を振り下ろし、ガリガリと削っていく。

あいああああ、と言葉になつていないか細く可愛らしい、情けなく怯えた悲鳴を上げるソイツは戦意を喪失したのかその場に蹲ってただただ私からの暴力を受け入れる姿勢になる。

これなら、と私はノコギリ鉋を振るう手を止めて武器を変形させた。

ガシヤリと小気味の良い音がする。

ソイツは息も絶え絶えに腕の間から私を伺い、私が身体全体で大きく地面を削るように武器を振るう様を見て目を見開いた。ガリガリと地面を削って渾身の力で縦一直線に切り上げる。投げだした両足の間、股間から交差された腕のところまで一気に肉を抉る。骨に当たる硬質な感触、内臓を引っ張る柔らかな感触、肉を切り裂く鈍い感触、——すべてが血に塗れる。

変形させたノコギリ鉋に付いた血を払い、もう一度ガシヤリと変形させた頃には壁に寄りかかる獣の開きが出来上がっていた。

今回は非常に上手く出来た。

どうやら私も腕を上げているようだ。

鼻を鳴らして少し得意になっていると階段の下から木盾を持った松明野郎と鎌を持った獣が姿を見せた。

階段の下には樽が散乱している。それらを避けるように鎌を持つ

た獣がまず私に怒りの目を向けて迫ってきた。

見たことのある振り上げを銃の側面で軽く払う。金属同士の音が鳴り、鎌を持った獣は私に無防備に身体をさらけ出した。一步階段を下りてソイツとの距離を詰め、体勢を崩しかけているソイツの胴体に蹴りを入れる。

ソイツは踏ん張ることもできず無様に階段から転げ落ち下の松明野郎を巻き込んで倒れた。

二匹が重なっている。

これなら、と階段の途中から飛んだ。

短い飛距離の間に身体を畳み、ノコギリ鉋を下にし片足を刃の背に乗せる。

私の全体重を乗せたノコギリ鉋は折り重なった二匹の上に滑り、何本もの肋骨が折れる音と感触が伝わってきた。片足に負荷がかかり、軋む。不安定な足場でバランスを取れる程器用ではない私は、そのまま無様に滑って尻もちをついた。

鉋に乗せていた足の神経が悲鳴をあげている。しばらくの間その場で悶絶した。

獣二匹も似たような状態らしく、血を吐く音と途切れ途切れの荒い呼吸と共に転がっている。

松明の火が樽に燃え移り、二匹が血反吐を吐きながら地面を這いつくばってその場から逃げ出そうとし始めた。周囲には燃え移りそうなものは多くある。私も離脱しないと巻き込まれてしまうだろう。

だが、逃がすものか。

ずりずりと這いずるソイツらに、変形させてリーチを長くしたノコギリ鉋を振るう。

腕を浅く切り裂いただけだったが獣共の動きが止まる。私に向けて何かを喚き散らしながら腕を振るい、私からの干渉を拒絶しようとする。

それが許されると思っているのだろうか。

骨の内側に響く痛みはまだあるが、立ち上がれない程ではない。ゆるりと立ち上がって這いずる二匹の傍に行く。

獣共は目に見えて怯え始めた。

何かを言っているが分からない。

ノコギリ部分で邪魔な腕を切り裂く。

切断までには至らないが動きが鈍くなった。それぞれの二本の腕を裂き、ソイツらの声に嗚咽が混じったところで止めて腹を蹴りあげた。私よりも体重が重たいソイツらはそれほど動くことは無かったので、私は屈んでソイツらを火の側にへと押す。

獣が喚き散らしている。火を嫌がっている。

じりじりと熱が私の顔を熱し、汗が伝った。

ぎやあぎやあと叫ぶソイツらは無我夢中で腕や足を振り回し私に血を塗りたくっていく。

ああ鬱陶しい。

さつさと焼かれろ。

お前たちは天上にへと行くんだ。

人として生を終わらせることのなんと素晴らしいことか。

獣性に身を浸し、人として生きれない生がどれほど憐れなことかを知らずに、ただ息をして病をまき散らす存在になり果てる事がどれほど人として醜悪なのかも分からずに、のうのうと生きるだなんてそんなことが許されるはずが無いのだ。

あまりの鬱陶しさに銃の持ち手の底で顔面を殴りつける。

逃れようとするのを追い、何度も殴りつける。

ああ鬱陶しい。これだったらノコギリ鉋で存分に切り裂いた方が早かったのではないか？

そう思いつつ黙々と殴り、一匹がぐったりとしたところで解放する。もう一匹の方は血を流しすぎたせいか朦朧とした目を私に向けていた。

次々と樽に燃え移り火が這いよって来る。私は二匹を置いてその場から離れた。

ソイツらの服に引火し、じりじりと焼けていく。

意識があるせいか二匹はそれでも逃れようと憐れにももがいていた。

私にも流石に思うところがあった。
痛みを与えたいわけではない。

ソイツらに銃を向けて、よく狙いを定めて撃つ。

見事頭に命中し動かなくなった。

カチツカチツと銃が虚しい音を立てる。

…… 銃弾を使い切ってしまったようだ。

ポーチの中にももう無い。調達しないといけないか。

私は軽く辺りを見回して火がこれ以上燃え広がらないか確認する。

恐らく大丈夫だとは思うのだが。

大丈夫では無かったとしてもいいだろう。

私はなんとなくだが予感をしていた。

このヤーナムに来てから、悪夢に足を踏み入れたような奇妙な事象を体感した。私が今まで培ってきた常識を覆し、現実でありながら御伽噺のような事が多く起こった。何度考えても、どう考えても常識に当てはまらない現象が多く起こるこの場所で、火事のことを心配する意味などあるのだろうか？

火事なぞ所詮現実のこと。常識の範囲内のことだ。

夢の中で起きたことが現実に影響するだろうか？

ここが現実だという認識をしているが、私はどうしても奇妙に足元が浮つく感覚が抜けきれなかった。

熱気が当たらないように距離を取りしばらくの間火葬を眺める。

火はそれ以上燃え広がらず、徐々に鎮火していった。

完全に鎮火する前に火種を拾い、獣の開きになった男にもくれてやる。

後のことは知らない。近くに木の板があるが土嚢もある。燃え広がることはないだろう。

身体の状態を整えたあと、先ほどのところに戻り転落防止用の柵に近寄り下を見る。そう高くは無い。

人家らしき建造物が並んでいる通りがあり、沿うようにそこかしこに火が焚かれていた。

荷車や馬車が留められ物が煩雑に置かれている様子は、生活感があるというよりも何かに備えているように感じる。

何かに備えている、その感覚を信じるとすると確かにあの馬車の留め方はあの陰に潜めば敵に襲撃を掛けられるだろうし、大人数で押せば壁にもなる。

道を邪魔しないように置かれた物たちも、何かに気を取られていれば足を引つ掛けそうなどころばかりにあった。

さてどうするか。

近くの階段から降りればすぐにでも道に出ることができる。

建物や馬車に阻まれて先を見通すことはできないが、ゆるく曲がった先の中空には建物が見えない。あそこには開けた空間がありそうだ。

そこに向かうかと考えたが、先ほどの獣になりかけた人共を考えると他にもあいつた輩がいらないとは限らない。

隠れながら進む分にはいいだろうが、こう隠れ場所が少ない道だと一度見つかってしまえば戦闘になるだろう。それが一匹とかならないが、大人数になってしまえば非力な私では抑えきれない。

私の視界から外れているもう一方の道の先を見ようと、身を乗り出そうとしたまさにその時、道を歩くモノがいた。

一番先頭に立つのは松明を掲げた男だ。

その後ろに農用のフォークを持ったモノや粗末な木盾を持ったモノ

ノ、大振りの鉦を持ったモノなどが続く。

ソイツらは一言もしゃべらずに真っ直ぐに前を見据えて歩いている。

進行方向は開けた場所がありそうな道の先だ。

私はソイツらに見つかからないようにゆっくりと後ろに下がってしやがみ込む。

階段を上って来られたりしたら厄介だな。今の私ではあの人数は無理だ。

しやがみ込んだ体勢のまま階段横にへと身を寄せ、顔を少し出してソイツらの行方を見守る。

ソイツらは周囲をゆっくりと見回しながらも道の先にへと進んで行った。

階段を降りたすぐ近くに火が焚かれていたが、その傍に誰かがいたようだ。のっそりと動き出したソイツらも一緒についていく。

……危なかった。すぐに階段を降りずにいて良かった。

火の傍にいたのは二匹だ。

気付かずに階段を降りていけばソイツらと相對し、火を掲げて歩くモノたちが合流していれば数の暴力で太刀打ちできなかっただろう。

道の先に進んでいくヤツらの背中を見送りながら、私はゆっくりと階段を降りる。

とりあえずアイツらとは逆方向に進んでみるか。

そう思い道に降り立つ。

そして気付いたが、階段の近くにあつた火はどうやら普通のかかり火ではなかったようだ。

地面に突き立てられた背の高い礫台には人の形のもものが両腕を広げる形で括られていた。

肉が削げ落ちて骨格が見えているそれは燃えるところが無いだろうに燃え続けている。

微かにだが油の臭いがする。

……恐らくだが、これは松明替わりなのだろう。

悪趣味だ。

火に浄化を見出すのはいいが、道具として使うのはいかなものか。

崩してやろうかと考えたがここで音を出すのは我が身の危険がある。

今は放っておこう。

アイツらが向かった先とは逆方向に進んで行くと、見覚えのある門があった。

柵状の門の先には見たことのある風景があり、ギルバートの家に行くための梯子がかかった建物も見える。どうやら一周してきたようだ。

私は近くにあった門の開閉装置の傍に寄る。

地面から生えるように伸びた開閉装置は、私の身体の半分以上もあるほど大きい。

身体全体を使って動かそうとするがなかなか重かった。苦勞してようやく動かせば、滑車に巻き取られた鎖がうるさい音を立てて門を動かしていく。門の方も古いのか耳障りな音を立ててゆつくりと開いていった。

よし、これでいい。

ヨセフカには悪いが、いざという時には逃走経路というのは多い方が良い。

さすがに隠れ場の少ない診療所には逃げ込まないが、ギルバートの家付近なら建物の陰も多く逃げ込めるだろう。

さてと、ここから先に進んでも意味は無い。やはりアイツらが進んだ先に行かないとダメなようだ。

踵を返したその時、横目に黒く大きなモノが動いているのが見えた。

危険を感じた私はすぐにそちらを見る。光沢のある金属を纏った巨漢が、私では到底持つことのできないような大きな斧を持って私目掛けて走って来ていた。

門の横に道があったのに気付かなかった。そこから走ってきた巨漢は、フードに隠れて見えないながらも私に殺意を向けているのが分

かる。

長いリーチのある斧が横風ぎに振るわれ、私は慌てて飛び退いた。

——斧の範囲にあった馬車が盛大な音を立てて壊され、避け切れなかった先の部分が私の腹を抉った。

灼熱の痛みが腹を中心に走る。

ギツと声を上げる。飛び退いた衝撃を殺せずに倒れ込んだ。

巨漢は凧いだ斧をすぐさま手元に引き寄せ、無様に尻もちをついて腹を抑える私に向かって、跳んだ。

上段に構えた巨大な斧が、巨漢が着地するよりも先に地面に到達する。

なんとか避けようと身体をずらしたが間に合わず、私の左肩に刃が食い込みそのまま両断された。

——ああ。

どこが痛いのか分からない。

私の傷口に寄り添った斧が引き上げられた時に神経がこすられて左半分があつた場所が全て苦痛を訴える。

がふりと口から血がこぼれる。目の前が明滅する。

くそ、くそ、くそ、くそつ。

あつけない。あまりにもあつけない。

くそ、くそ、くそ、このクソ共が。

明滅する視界のなか、巨漢を睨む。

フードの下は見えない。だがソイツが私を見ているのは分かる。

私はあるにつけたけの怨念を込めてソイツに罵声を投げかけた。

腹立たしいことにソイツは首を少し傾げて私の言葉を馬鹿にするような素振りをした。

左半分から血が流れ、あまりの痛みに痙攣する喉元が血を吐き出す。

あたたかい血を失っていく身体は急激に冷えていき、寒さと痛みにがくがくと全身が震え始める。

制御の利かなくなつた四肢が——今は右側しかないが——好き勝手に跳ねだした。

巨漢は何を思ったか斧柄で私の身体を突いた。

刃物がついてない木の部分で、虫が生きているかどうかの確認をするときのように突き回す。

意識はあるが死ぬのも時間の問題だ。

私は屈辱からノコギリ鉋を持ち上げようとするが力が入らずにソイツを睨みつけるしかできなかった。

巨漢は私の傷口や、顔、武器を持った右手など色んなところを突いた。

そこに感情は乗っていない。子供が無邪気に虫を突き回して遊んでいるというよりも、何か観察をしている雰囲気があった。

巨漢は何度もその行為を繰り返す。

くそ、くそ、この畜生共が。くそ、くそ、くそ……。

視界が暗転して何も見えなくなる。だが身体を突く木の衝撃はあった。

暗闇の中、怨嗟を吐きながらも光を見つける。

何かの記号が眩い光を放っているようにも見えるそれは、ぼんやりと私の脳内に焼き付いた何かだ。

脳みそが痒い。痒い、苦しい。

その部分の脳みそだけを引き千切りたい。熱い、痛い、苦しい、苦しい、………。

ひかりが、よぎった。

一つ息を吐いて顔を上げる。

鼻腔を掠める不快な香のにおいを追いかけて視線を移せば、獣避けの香を吊るした窓が見えた。

ゆっくりと立ち上がって、ここがギルバートの家の前であることを確認する。

自身の身体を見下ろしてそこに左半身があることも確認し、銃を持つ左手を持ち上げて異常が無いか何度か握り直す。

先ほど死んだとは思えない、いつも通りの私の身体だ。

死ぬ前に感じていたはずの憤りや憎しみが嘘のように消え、感情は波打つことなく静かに凧いでいる。

凧いでいる思考で考えてようやく気付いたことがあるが、死ぬ直前まで私はどうやら気分が向上していたみたいだ。興奮していた、に近いのだろうか。

薄く広がった全能感のベールを被り、それに気付くことなく獣たちを狩りさらに増長していた。

殺された後によくそれに気付くことができるとは。

我を見失わないようにしないといけない。

我を見失った者など獣たちと何が変わるのだろうか。

カラ、と音がした。

視線を下に向けると地面に突き立つ棒にぶら下がるカンテラがあることを知る。

歩幅一歩分、目の前にあり、それはここに無いはずのものだった。

獣避けの香が焚かれているものとは違うみたいだ。何も香りはないが、目を惹く色合いの灯りがぼんやりと存在を主張している。

こんなものがここにあっただろうか、と考えているとズボンの裾に触れようとしている白い小さなものが見えて後退った。

白い小さな手が空を切り、所在なさげに揺らいだ後にカンテラが吊るされた棒に添えられる。

棒の周りをうごうごと蠢いている白いものたちを観察する。

最初は手の平ぐらいの布袋が動いているのかと思ったが、よく見ると得体の知れないものだ。

白い芋虫を彷彿させる肉感的なものは見ようによつては赤ん坊に見える。それも新生児に近い大ききで、白という、人の赤ん坊ではありえない色合いと赤黒く裂けた小さな口が不気味だった。

蠢く白い小さなものたちは棒を支えているようだ。

四匹、いや五匹いる。それらは近くににいる私を見上げていた。

しばらく観察していたがこちらに寄ってくる気配は無い。三歩分の距離にいる私に近寄つて来ないのなら処理はしなくて良いか。

こいつらは獣というには小さすぎるし得体が知れない。

こいつらはなんなのだろうか。

いや、そういえば夢の中の人形が灯りがどうたら言っていたな。その際に使者のことも言っていた。この白いものことだろうか。

こんなものが応えてくれるとは思っていないが、私は一応の確認に声をかける。

が、予想通りにその白いもの達は私の言葉に反応を示さず、私を見上げたり身体を揺らしていた。

本当に、このヤーナムに足を踏み入れてから理解できないことに出くわすことが多すぎる。

狩人たちはこんな常識外の世界で獣を狩っていたのだろうか。

人のためとはいえ、いつか気が狂いそうだ。

もしかしたらこの白いものたちは気狂いの先触れなのか？

それなら、気狂いの象徴であるのなら潰していた方が良いのだろうか。

足を踏み出して白いものの一匹を踏み潰す。

地面に足をつけた時になんか感触も無く、訝しく思い足を上げると地面から飛び出すように白いものが生えた。私に踏み潰される前に地面の下に逃げたということだろうか。

その後何度か踏み潰そうと躍起になったが全て徒労に終わった。

……私は一体何を遊んでいるんだ。

そいつらのことを諦めて先に進むことにした。

獣どもはまたいるだろうが、死ぬ直前に開けた門を通って広場であろう場所まで行くか。

ギルバートの家の近くにある梯子をするすると降りる。

予想通りに、見知った獣がいた。憎悪の目で私に駆け寄ってくる獣に銃を向け、それに弾丸が込められていないことに気付いて舌打ちする。そういえばそうだった。弾丸はもう切れている。

大振りに振り上げた斧を、タイミングを計って銃の側面で払う。

驚いた表情で大きく体勢を崩す獣に向かってノコギリ鉋を振り下ろし、何度か切り付けて肉を削いでいく。このまま切り殺すか。そう判断して私は休まずにノコギリ鉋を振るった。

一度目の時とは比べ物にならない容易さだ。ソイツの膝が崩れて地面に伏すまでそうかかるとはなかった。ソイツが持っていた松明を拝借して火をつける。

あとは、とこの近くにいるもう二匹も処理をして浄化する。

二匹の相手をした際に右腕の肉が少し削がれたが、腕の動作には問題ない。

左手の銃を仕舞い、その部分を圧迫する。

ヨセフカの診療所で走り書きと一緒に置かれていた輸血液の存在を思い出し取り出した。

銀の筒の尻を押ししてそこから赤い液体が滴るのを確認した後、それを怪我した腕に突き立てようとする。

……刃物で切られるのも嫌だが、それよりも痛みが小さいであろう針はどうしてこう、それ以上に抵抗感があるのだろうか。

一つ呼吸をして腕に針を刺し、一気に血を入れる。

あとは止血をしたらいいだろう。

空になった筒を、他の輸血用のものと間違えないように別のところに仕舞い銃を持ち直す。

巨漢に殺される前に開けた門は、最初からそうであったかのように開いていた。

そのまま進み、近くの馬車に身を寄せて巨漢が出て来たであろう横道を覗く。

少し離れた先に、巨漢はいた。ソイツは何をしているのかは分からないが同じ場所を行ったり来たりとしている。アイツは一体何なのだろうか。

目を鈍く照り返す鎧に目を細める。

今の私ではアレには勝てない。どこに刃を通したら良いか分からず、力や体力方面でも押し切られてしまおうだろう。

巨漢が背を向けたのを見計らって道を横断し、少し離れた先に歩く集団に目を向けた。

松明を持った男を先頭に、広場に向けて歩いていっている。

ソイツらが背後に目を向ける前にどこかに身を隠さないと。

私の身体ぐらいは隠せそうな背の低い土嚢に近寄り屈む。

しばらくの間その場で待機し、十分時間が経った頃合いに集団が進んだ先を確認すると誰もいなくなっていた。

よし、進むか。

極力足音を立てないように進んでいき、趣味の悪い人間松明の横を通り過ぎる。

ここからは私の知らない場所だ。速度を落としてゆっくりと歩く。

周りの音を聞き洩らさないようにと神経を研ぎ澄ます。火が燃える音がうるさく聞こえた。

障害物を作るための馬車が多く留められている道は視界が悪い。

その陰に何かがないかと注意しながら進み、広場の一歩手前部分にあった馬車の後ろを覗き込んだ。

馬車の後ろには地面に座り込み項垂れている獣がいた。黒い外套を着たソイツは注意していなければ馬車の陰で隠れて意識に引っかけられなかっただろう。

服から覗く肌からは獣のような毛が生えており、その腕も異様な程伸びている。顔は見えないが普通の人間ではない。

手に握られているのは長銃だ。

危なかった。そのまま進んでいれば背後から撃たれていた。

項垂れている獣に近寄り、ノコギリ鉋を奮う。突然の事に短く悲鳴を上げる獣。

あの集団が近くにいてもかもしれないのでここで大声を出されると不味い。

顔を上げてこちらを睨みつける蕩けた瞳に向けて、押し掛かるようにして切り付ける。

ソイツは何度か短い悲鳴を上げるだけでなすすべもなく命を手放した。

ソイツが死んだことを確信してからすぐに周囲を警戒する。

周りには誰もいない。

数秒、辺りに音が無いが警戒したが、誰かが異常を嗅ぎ付けて駆けってくる音は無かった。

息絶えた獣が持っていた銃を手に取り、近くの物陰に身を寄せる。

もう少し行けば広場に出る。そこから誰かが来ていないか確認しなければ。

見つからないようにそつと道を進み、広場が見える位置に移動した。

薄暗くなりつつある周囲を明るく照らす巨大な火が広場の中央に据えられていた。

その周りをぐるつと囲むように獣たちが群れ、その炎を見上げるようにして立っている。

私はソイツらの数の多さに小さく舌打ちをし、そしてその巨大な火の中で燃えている物に顔を歪めた。

あれは、なんだ？

人よりも一回り二回りほど大きいものが礫にされ、燃やされている。

骨格はどことなく人に似ている……いや、違う、あれは獣の骨格だ。獣と化していく人のもではなく、完全なる獣のものだ。

道中にあつた人間松明と同じくソレも肉が削げ落ち骨と皮だけであり、表面はぬらりと火を照り返している。火が衰えることなく巨大な獣の骨を舐め、その様子を呆けたように周囲の獣たちは見上げていた。

あれはもしかしてアイツらが狩ったものか？

なら、燃やしているのはこれからの夜の光源でもあるが、自分たちの功績を称えるための首級のようなものなのだろうか。

確認を終えるとそつとその場から離れ、広場から見えないよう馬車に身を寄せる。

手に持っていた銃から弾を抜き取りつつ、この広場をどう制圧するかを考えるが、何一つ案は思い浮かばなかった。ああも大人数だと簡単に押し切られてしまう。一匹ずつ相手になったとしても私の体力が持たず、遠距離から各個撃破を狙おうにも銃弾の数も足りないしアイツらにはそれほど効かない。

唯一有難いのは火に困らないことか。

火を使って広場の連中を掃討できはしないかと考え込んでいると、耳が足音を拾う。

それは広場からだった。

しまった。考えに気を取られていた。

足音は複数聞こえる。それが何人かは分からず、十人以下であろうという当たりしか付けられなかった。

近くに隠れられる場所はない。馬車の下も、車輪が大きく作られているので少し遠くから見れば私がいることは丸分かりだ。

こんなことなら馬車の中に入っていれば良かった。

足音が徐々に近付いてくる。

馬車と壁に身をぴったりと寄せ、ここからどうするかを必死になつて考える。

人数が十人以下だとは思うのだが、それも近くの音を聞いての結果だ。後ろに私の感知できない人数が続いていたとしたら私ではどうしようもできない。そのまま囲まれて憎悪を叩きつけられ殺されてしまう。

人数がそれ以下だったとしても、三人以上になれば逃げ切るのも難しい。アイツらは私のことをどこまでも追いかけて来るだろう。

足音が近づいて来る。

心臓が嫌な重さで鼓動を打ち、不快で気持ちの悪い血を送る。死にたくない。殺されるのは嫌だ。

怪我を負っている腕を、ノコギリ鉋を持った手で押さえて圧迫する。

どうしよう。どうすればいい。馬車から飛び出して切り込むか？ 怯んだ隙に逃げるか？ このまま見つからないことを祈ってこの場所に居続けるか？

足音が近付いて来る。

もうすぐそこだ。

馬車の側面に到達している距離。

今この瞬間が切り込む最後のタイミングだ。行け、行け、早く行け。ゆっくりと複数人が歩く音がして、松明の火の明るさが地面を照らす。その明かりが徐々に大きくなって行って、松明の火が見えた。

身体が緊張に硬直している。ダメだ。もう切り込むタイミングを逃した。

馬車の下に潜り込むのももう遅い。見つからないように祈るだけだ。

松明を持った獣の横顔が見え、歯を食いしばって壁に身を押し付ける。

——— ? ? ? ? ? ——— ツ ! ! !

その絶叫に息を止めた。

それは梯子を上っている時に聴いたものだ。

松明を持った獣は驚いて後ろを振り返る。

梯子を上っていた時と比べると明らかに近くなっている。

まだ距離はあるように感じるが、あの音量だとそれが正しいのかは分からなかった。

松明を持った獣はしばらく動きを止め、踵を返して広場の方へと戻っていった。

……とりあえず、今死ぬことは無くなったようだ。

広場の方で人の声が飛び交う。中には怒声もあり、獣どもがザワツいているのがここからでも分かった。

そろりと馬車の陰から広場を覗くと大勢の獣が炎を中心に集まっていた。数は二十以上。……あんなものに適うわけがない。

獣どもは何か言い争っていた。

ここをどうする、殺し尽くさないと、と断片的に聴こえて来た。

アイツらはあの絶叫の主のところに行こうとしているみたいだ。

声を聴いただけでも身が竦んでしまうようなものに立ち向かうとは。

広場の中心にある光源の先には封鎖された大扉があった。その扉を指さし、一匹の獣が大声を上げている。

獣どもの言い争いは激化していき、リーダーらしき獣が怒号を上げて広場の奥へと行った。その後ろを率先して付いていく者、それに釣られて行く者、気乗りしていないのか足取り重くついていく者が続き、大扉の脇にある通路を蟻の行列のように潜り抜けて行った。

広場の獣たちは、数匹を残して全ていなくなった。

広場から獣がいなくなった。

顔を少し出していた馬車から様子を伺いつつ、するりと近くの階段まで移動する。

馬車の傍で事切れている獣に奪った銃を放り返してやり、数段ほど段差をあがった。通路の側面を切り込んで作られた階段の半ばで止まり、転落防止用の柵の隙間から獣を探す。少し視界が高くなっただけで広場の様子が先程よりも観察しやすくなる。

私の見える範囲には三匹程度。

火炙りにされている磔の巨大な獣を見上げているモノ。

私が階段をあがった先に続いている通路の遠くに斧を持った長身のモノ。

この通路の対岸、反対側にもある通路の上をうろついている銃を持ったモノ、だ。

何度か辺りを確認するために身を乗り出しつつ、これ以上いかないかと探り、三匹以外の動きがないことにソイツらを駆除すれば先に進めると判断する。

このぐらいならいけるだろうか。

できれば各個撃破と行きたいところだが。

一対一なら今まで通りの対処でなんとかできるだろうが三匹になると難しい。

なにか一網打尽にできる方法はないかとも考えたが、私が今持っているものは火炎瓶や銃、ノコギリ鉋ぐらいだ。

さあ、どうするかな……と思索していると、私が潜んでいる通路の奥にいる獣が手に持っていた斧を壁に立て掛けた。懐からなにかを取り出すとそれを煽る。ソイツが今も持っている松明の火をそれはきらりと反射した。

スキットルだ。真新しい銀色のスキットルが光を反射している。私はなんとなく気になってその銀色を凝視した。ソイツは至極旨そうに飲み、その飲み慣れた様子から酒かもしれないと当たりをつけ

る。

目を細めて飲み下すモノ。

容姿も相まって本物の獣が加虐性を隠しもせず肉を踊り食いしているようにも見えた。

ソイツの口の端からツーツと目を引く赤黒い線が頬を伝い、顎から滴り落ちていく。

中身を飲み干したのかスキットルから口を離れたソイツは、意地汚くスキットルを振り、舐め、頬についたものもべろりと掬う。手の甲でアゴを拭ってそれも舐め、楽しくなってきたのか陽気に鼻唄をうたいはじめた。

一連の光景を見て、私は嫌悪にほぞを噛んだ。

あれは恐らく、血だ。

私が獣を嫌いすぎて、獣は斯くあるべきと決めてしまっているだけかもしれないが、あの赤黒い輝きは一般的な飲料だと言い切るには生々しい。

酒に酔うではなく、血に酔う獣共。

あれは隣人には成り得ない。

嫌悪をこらえつつ、あの性質は使えるのではないかと思索する。

酒呑みは酒に目がないが、似たようにアイツらもそうなのではないか。そう考えた。

あの獣共を一ヶ所に集めて景気よく燃やせたら良いのだが。

アイツらの毛は硬質なわりによく燃える。衣服と合わさって火だるまになる速度も早い。

所持している火炎瓶はあとひとつだけ。心許なすぎるな。

火炎瓶を投げつけて中のアルコールをぶつけて獣の一匹が持っている松明を奪ってそれで殴り殺すか？

広場の中央で燃える磔を倒せたら牽制にもなって良いのだが難しそうだ。

道中の人間松明の火も、襲撃をかける前だと目立ちすぎる。

私の立ち回り次第の作戦とも言えない作戦だが、私の脳みそではそれ以上のことは思い付かない。

階段を降りて銃を返してやった獣の死体のところに行く。

通路の先の獣は懐からスキットルを出していた。慣れた動作から慣習になっているだろうし、同じ獣なら似たようなことをしているのではないか。

漁ってみれば私の考えは正しかった。

アレと同じような鈍い銀色のものを持っていて中身は案の定、鉄臭い。

これをどうするか。

獣とはいえアイツらにも考える力はある。

下手な罠を仕掛けても見破られる。手の中のスキットルを眺め、今回はこれは使わないでおこうと自身の懐にしまう。

さてどうするか。あいつらの目を掻い潜って先に行くことは難しいだろう。一匹ずつおびき寄せることができればいいのだが。

思索していると広場の先の閉じられた大扉が大きな音を立てた。

何か大扉を開こうと叩きつけたような音だ。だがその大扉には門がさかれていて開くことはなかった。音の大きさと比べてびくともしない鉄製の扉は、向こう側の何かの侵入を確実に防いでいる。

あまり大きいものではない何かがぶつかっている音が一定のリズムで響き、扉の向こう側の何かは徐々に諦めてきているのか音が弱々しくなっていく。

扉の異常に散らばっていた獣共が扉前に集まってきていた。

大扉の前の馬車に隠れて見えていなかったが、猟犬もいたようだ。銃を持った男に追従するようにして大扉を見ていた。

ドンドンと扉を殴りつける音が響き、獣共がそれに気を取られている間に大扉横の道を抜けるかと考えていると、大扉の向こう側が何やら騒がしくなってきた。

あれは、声だ。

それも先程の獣共のものじゃないか？

何かを叫んで近付いてきている。それは離れた場所にいる私にもよく聴こえるもので、絶叫に近いものだった。なんだろうか？ 獣共に見つからない程度に身を乗り出して観察していると、大扉が轟音を

響かせた。

人の数十倍はある大扉が強く軋む。

爆発音に似た轟音を響かせた鉄製の扉は大きくたわみ、門が衝撃で半ばへし折れる。

あと一度先程と同じものを食らえば扉はあつけなく開くだろうと確信を持てた。

私は異常な事態に慌てて身を隠す。近くの馬車の底をくぐり抜け、来た場所に戻る道を見、そして扉を見る。

????????

ツ！！

何かの絶叫は、雄叫びだった。

扉が衝撃に耐えられず跳ね飛ばすようにして開かれた。

扉を開いたのは、獣だった。

今まで見て来た、人間のふりをした獣ではなくもつと完成されたものの。

肉を削ぎ落とした細い骨と皮だけの肉体。肋骨が突き出した身体は何か凝固したのか全身が黒く、左腕だけが何故か獣の毛が纏わりつくように生えている。大きく肥大化しているように見える左腕が振るわれた。

広場で呆けていた獣共が簡単に宙を飛んだ。

前に突き出した顔は犬に似たもので、炎が揺らめくが如く靡く獣毛が覆っている。側頭部に生えるのは、あれは角だろうか。大きく見開かれた目は次の獲物を捕らえている。その大きな巨体に比べるとあまりにも小さな存在である猟犬は無残にも踏み潰された。ぎよろりと目が次を捉える。銃を向けて撃とうとしていた獣に細い右腕を奮う。鞭のようにしなつた腕は獣を弾けさせる。

背骨に沿って生えていた獣毛が流れる様子を私は見ていた。

次々に、的確に生きたものを潰している悪魔染みた獣。

私は自分の無意識の思考に一人納得した。そうか。どこかで見たことがあると思っていたのだ。

あれは悪魔だ。見てみる。あの側頭部から生えた角は悪魔の象徴ではないか。赤ん坊でも知っているサタンの絵を彷彿とさせるものだ。

広場の中央に誇らしげに掲げられていた獣の松明を薙ぎ倒し、火をものともせず傍若無人に暴れ回る様を見せつけられて私の身体は虚脱していた。魅せられた、わけではない。ただあの純粹な暴力と殺意に怯えて動けなくなっているだけだ。そうだ。それ以外には無い。

先ほど広場から出て行った獣たちだろうか。

それらが大扉の先からぞろぞろと悪魔に農具を振るう。

何度かその身体に到達して傷を負わせてはいるが、それも致命傷になり得ない。

悪魔が奮う腕が次々と獣を屠っていく。それらを眺めていた。

…… 早く、逃げないと。

その思考に至った時にはもう遅かった。

広場にいた動くものたちが千切れて散乱し、その場に立つものはいなかった。

目が私を捉えた。

巨軀が力を溜めるために身を屈め、そして跳んだ。

あまりの速度に空を見上げると、こちらに顔を向けている犬の顔と骨と皮、鋭い爪が生えた足の裏が見えた。

身体に衝撃があつたのを最後に私の意識は途切れた。

目を開くと目前に白い物体が見えた。

小さなそれは私の顔に向けて細く白い腕を伸ばしていた。

あまりに突然の出来事に大きく仰け反る。勢いが付きすぎたせいでそのまま地面に尻をついてしまった。

目を見開き白い物体の正体を観察すると、それはあの棒の周りを蠢く白い物たちの一匹だということが分かった。自分の手が届く距離から私が離れたのが名残惜しいのかその空間を数度掻くように手をこまねかせた後、カンテラがぶら下がった棒を支えるのに戻る。

私を驚かせたものは使者たちだった。

見開いた目で茫然と彼らを凝視し、停止していた脳みそがゆつくりと活動を始めていく。

そうだ。私は悪魔に踏み潰されて死んだのだった。

周りを見渡せばそこはギルバートの家の前だった。

またここからか。

私はおもむろに立ち上がりギルバートの窓をノックする。あれからどれぐらい経ったかを訊ねて、「十数分前ですよ」という言葉を聞いて一つ息を吐く。

本当に意味が分からないな。

これからまたあの場所に行くのかと考え込み、せめてもっと火炎瓶があればなと思っているとギルバートから声をかけられた。

「獣狩りの方……これを渡しておきます。私には無為の品でしたが、あなたなら違うでしょう」

そう言っ窓が小さく開けられ、その隙間からおかしな形の物を差し出された。

私は素直に受け取り、これが何かを訊ねるとどうやらこれは火炎放射器らしかった。

それはそれは。……良い物を貰ってしまったな。

ギルバートに何度目か分からぬ感謝の言葉を述べ歩き出す。

肩に掛けられるようにと紐が通されたそれを後ろに回し、移動に支

障が無いかを確認する。

少し、重いかもしれない。

これ以上の荷物を増やすと私の枯木のような身体ではいつか潰れてしまいそうだ。これ以上必要なものが増えなければいいのだが。

走るのにも問題が無いことを確認して先に進む。

あの悪魔が出現する時間までにはどれぐらいあるのだろうか。

頭の中で数を数えていく。

私は近くの梯子を下りて行った。付近にいた獣が私の存在に気づき近寄ってくる。

私が地面に到達した頃にはすでに武器を振りかぶっていた。なんとか横にズレて攻撃を躲す。壁に斧が辺り不快な音が響いた。

ソイツの攻撃を避けながら相手を注意深く観察した。

斧を振る速度は速いが大振りであり読みやすい。一体であれば問題はなかった。

ならばとソイツから大きく距離を取った。獣は私の探るような動きに警戒をしているのか急に距離を詰めて来ることはしない。ならばと背中を向けて門の方に軽く駆ける。獣は私の動きを追うようにしてついてきた。その動きは緩慢だ。全力で走ってくるかと思っていたが、小走りですいてくる程度のようなうだ。

殺意を漲らせた目をしているわりには追う意思は弱いのかもかもしれない。

それは困る。非常に困るな。

私は振り返り、獣に声をかけた。

お前の家族は、友人は、大切な人は、皆獣になってしまったのだろうか。

獣に堕ちてまで生き永らえる愚かさをお前は真に理解しているのか？

人を慈しみ、周りに感謝し、愛を捧げ誰かを愛する、その心が今のお前にはあるのか？

酒瓶に血を溜め極上の美酒と勘違いし煽るその姿は醜悪な獣その

ものであり、倫理も何も無い穢れた存在になっていることをお前は理解しているのだろうか。

その血が誰のものなのか分かっていいのか。きっとそれはお前を愛した誰かを、お前の手から生えるその爪で奪い採ったものなのだろう。

ああ吐き気がする。

おぞましい存在め。

私が浄化してやらないと。

それでこそお前たちは報われるんだ。

獣は私の言葉に怒りを咆哮として発した。

周辺の獣共も、私の言葉を聞いていたようで私に駆け寄ってくる。

私はそいつらに背中を向けて駆けだした。

開いた門を抜けて、なりふり構わず駆けつけた私の存在を認識した巨漢が巨大な斧を振りかざす。

駆けそうになりながらそれを躲し、近くの馬車が破壊される音を聞く。

私はあの巨大な獣が磔刑にされた広間にへと向けて走った。

道を巡回している獣たちの横を抜けて、罵声を後ろに聞く。

この時点で少し息が苦しいが別にいいだろう。

広間の中央に燃える獣の亡骸を確認し、私はそのままその場に躍り出た。

火に覆われた獣を見上げていたヤツらも、周りをうろろうろとしていたヤツらも、突然の闖入者である私を見つけ少しの戸惑いの後に殺意を向けて来た。

私は構うことなく近くの短な階段を上がる。上がって折り返し、真っ直ぐに突き進めば大扉の横に設置されている格子を抜けて向こう側に行ける。

この場を纏めているのであろうリーダーらしき獣が怒号をあげた。獣共が一つの生き物のようにならねり、私を目掛けて走ってくる。

銃を所持している獣を目視し、ソイツの銃口から逃れるよう横に移動する。丁度引き金が引かれた瞬間であったようで、爆発音と共に私

の横を弾が通過していった。

数を数える。あれが来るのはどれぐらいだっただろうか。

走りながら首を巡らせ獣の数を確認する。多い。正確な数は分からないが、先程よりも確実に多かった。

斧を振りかぶり、農具を薙ぎ、鉈をめちやくちやに振り回す獣の攻撃をなんとか避け、ギルバートに貫った火炎放射器の使い威嚇し格子の向こう側にへと来た。

小さな広間。道路の終着点である広間の真ん中には噴水が置かれていた。周囲は雑多に馬車が転がされ、荷物が散乱し、土囊のようなものが積み重ねられている。

周囲の家から姦しい笑い声が聴こえる。ぎやあぎやあと獣の鳴き声が背から聴こえる。

私はとにかく走った。

獣たちを無視して先にへと行く。

獣たちを引き連れて小さな広間を横切り、階段を上がって住宅が密集している場所を突っ切っていく。

踊り場で休憩していたらしき獣がいた。横には犬もいる。私の存在をいち早く認識した獣が犬を私にけしかける。私の脚では犬には勝てない。狙いをつけて銃を撃った。犬の顔側面に銃弾が命中し、悲鳴をあげて飛び上がり転がった。

医療教会にへと行く道。ギルバートは大橋の先にあると言っていた。

そこを目指して走る。

大橋の上は物に溢れかえっていた。

壊された銅像、妙なオブジェ、その上を徘徊する……黒い体毛に覆われた巨軀の犬。

あれはヨセフカの診療所で見たと同じだ。人間大ある黒い獣は犬と同じく四つ足でうろうろと徘徊している。それが二匹。

壊された馬車が聖堂街にへと続く大橋の先を塞ぎ、少し空いた道はその犬共が陣取っている。

遠目に見える大橋の先にある門が閉じられていることをなんとなく

くではあるが確認し、私は犬共のすぐ脇にある下りの階段に向かって走った。

すぐさま私の存在に気が付いた犬共が命を刈り取るが如く伸びた大爪を奮って来る。

避け損ねた。

ガリ、と右半身を爪が抉る。顔が、腕が、腹が、削られた。

目は、目は無事だ。痛みが襲い来る。私は走った。

後ろから獣共の声がする。私を罵倒する声がある。

私を罵倒していた声は犬の雄叫びに覆いかぶさられた。

怒号が響く。後ろで獣と犬共の吼える音がする。

ぎゃあっ！ と悲鳴が聞こえた。

計画していたものとは違ったが、どうやら獣同士で争いを始めてくれたようだ。

一匹ずつまともに戦うだなんて馬鹿らしい。あの悪魔に全て屠ってもらおうと思っていたのだが、これはこれで良かった。

ギルバートが言っていた言葉を思い出す。

大橋を挟んだ南側に下水道がある。その上に架かる下水橋を渡れば聖堂街へと続くはずだ。

その言葉を信じて走り、下り階段が終わり小さな空間へと出た。土嚢が積まれ、麻袋に詰め込まれた荷物が積まれ、どこに下水道があり橋があるのかが分からなかった。

右手側の視界が開けていた。その先にはあの燃える巨大な獣が磔にされている広場が見えた。

……なら、左側に何か無いだろうか。

そう考え麻袋が積まれた道を選ぶ。行く手を塞いでいた麻袋を勢いよく乗り越えて、——その先に足場が無いことに気が付いた時には遅かった。

身体が落下を始め、ひゅつと喉が鳴り咄嗟に頭を庇う防御姿勢になる。

このまま落ちる、と思った瞬間、丸まった背中側から何かにぶつかって転がった。

.....、

仰向けになり空を見上げる。

ハッ、ハッ、と荒い息がどこか他人事のように思えた。

酸欠になりかけてぼやける頭を微かに巡らせる。木の破片が見える。震える手で床に触れる。木のささくれが手の平を傷つける。

首を小刻みに動かして周りを確認し、そこが木で組まれた足場であることを理解した。

どくどくと血が流れていく。

頬を削られ、口の中に達しているのが分かる。

血が、血が私の中から抜け出ていく。

血を足さないと。そうしないと、また死んでしまう。

震える指で輸血液を取り出し、腕に刺した。

痛い。痛い。犬に削られた傷よりかは痛くはない。

遠くで喧騒が聴こえる。

ああ、それと。

—— ?? ?? ?? —— ツ ! ! !

悪魔の咆哮も聴こえ、途中で数えることを忘れてしまった秒数もどうでもよくなった。引き攣る笑みを浮かべ、一段下がった視界に見える空を見上げて痛みに呻いた。

耳鳴りがする。ぼわぼわと空気が耳から脳を行き来している。

出血を抑えようと傷口に手の平を押し付けてぼんやりと空を眺める。

その視界もはつきりと見えているはずなのに全てがぼやけているように思えるのは酸欠のせいだろう。

もしかしたら私に殺意を向けてきていた連中が私を探しにここまて来るかもしれない。早く身を隠さねばと気が焦るが身体が重くて仕方がなかった。激しく上下する腹が平坦になって来た頃、私はようやく身体を起こした。

ギルバートは橋門は閉じられていると言った。それはここまてに来る時に見た、遠目に見えた門のことだろう。下水道から通れば聖堂街にへと出られると言っていた。その下水道とやらはここのことだろうか。

私は木板で組まれた足場の下にさらに足場があることを確認して降りる。

さらにその下にもあったので降り、空が遠ざかっていく。光を嫌い地下にへと潜っていくネズミのような気分だ。微かに鼻についていた臭いが、降りるたびに強まってきた。

軽い音を立てて木板で組まれた最後の足場にへと到達する。そこから見えるものに目を細めた。

ギルバートが言っていた水道橋は恐らくここだ。

私の視界の下には汚水が溜まった水の道と、その両脇に高く聳え立つ壁がある。その壁の上は通路になっており、そこを松明を持って歩く人型の獣の姿が確認できた。水の道は時折のたくりながら真っ直ぐと伸びている。

この場所は特に水が流れていないようで、水位は低かった。水の上には何かがあることに気がつく。蹲っているように見えるそれが何かは分からない。丸々としたそれは四つん這いになっているのか、もし本当にそうなら水の高さはほとんど無いのだろうか、と思うぐらいし

かできなかった。

さて、ここからどうするか。

下水道から目を離して通路の上を観察する。

こんなところにまで獣がいるとはご苦労なことだ。

巡回するよう動くそいつらをジッと見て分かったことは、街で見た獣よりもさらに獣染みた造形であるということだ。一応は服を纏ってはいるが手足が異様に長く、収まり切らない体毛が窮屈そうだ。手には松明、もう片方には……なんだろうか、細長い物を持っている。槍だろうか。

通路の上を歩くのは二匹だ。両側の通路に一匹ずつ。一番近い奴は槍を、もう一方は鉞、いや、曲刀のようなものか？ 通常の人が持つには大きすぎる反った刃を持っていた。

見る限りだと体力や膂力がありそうだ。一対一でも競り負けるかもしれない。

一匹を相手にすれば必然的にもう片方も来るだろう。さて、と考えた。

手に持った銃の弾数を数える四発しかない。どこかで補充したいものだが。

ギルバートから貰った火炎放射器、血の入ったスキットル、と今持っているものを確認して行き、おもむろにスキットルを手にとった。

そのスキットルを私とは遠い方の獣に向けて放り投げる。

木板で組まれた足場に伏せて、スキットルが床に叩きつけられた甲高くも鈍い音を聞いた。

獣の驚いた声が聴こえ、ふごふごと獣独特の鼻息が少しの間響き、そして速足気味の足音が聞こえる。

私は身を軽く起こして通路にへと降り立った。私がいる通路に、遠ざかろうとする背がある。私はそれに向けて鉞を払った。

痛みに呻く獣の声。ソイツは瞬時に私の方にへと向こうとした。ソイツが完全にこちらに向き直る前に私はソレに向けて体当たりをする。斜め横からの衝撃に踏ん張ることができなかったのか、ソイツ

は下水道に落ちていった。

もう一匹の方も流石に私に気付いたようだ。

通路に渡された短な橋を通り私の方にへと近づいて来る。

私はソイツを前にしてその大きさに歯を噛み締めた。

背を丸めて少しは低くなっているが、奇妙に細長い背丈は私に覆いかぶさる程ある。

外の光が入りづらい場所でも分かる、きらきらとした目は獲物を捕食しようとしている獣のソレだった。松明が爛々と光る眼玉を照り返している。生ものの潤いが火の光を反射している。

奇妙に歪んだ振り返った刃物を私目掛けて大きく払われた。

後ろに下がって避け、次の動作に移る前に速攻をかけようと足を踏み出す。

獣は私のことをジッと見ていた。私がノコギリ鉋を奮いソイツの胴体を削る。獣は私のことをジッと見ていた。衝撃に軽く後ずさったものの獣は私のことをジッと見て刃物を薙いだ。私はそれを銃で防御して後ろにへと行く。

獣は一度も逸らすことなく私のことを見ていた。

身体の底から湧き上がる嫌悪と恐怖に、歯を食いしばった。

私はその目から逃れたいがために鉋を振るった。ソイツが刃物を振り上げて私を攻撃しようとするたびに避ける。受けたくなかった。先ほど受けた時に銃が飛ばされるのかと思うほどの力が込められていたのもあるが、本能的に嫌悪がそれを良しとしなかった。

動きはそれほど速くはない。街にいた獣共の方が速いまでであった。私はソイツを何度も切り刻み、ソイツが動かなくなつたのをいいことに松明を奪い、その細長い身体を蹴り上げて下水道にへと落とした。

最初に下水道に落とした獣が梯子を上ってきた。

ソイツは私にへと怨嗟を投げかけることは無かった。

二匹ともこの場所を巡回していたということは、私が先ほど殺した獣は仲間なのではないか。槍を持った獣は仲間だと思われる獣が下水道に落ちていくのを目で追うことなく、私のことをジッと見てい

た。

私は途端に恐ろしくなつて松明をソイツに全力で投げる。槍で防がれて松明は下水道にへと落ちていった。

すぐに足を踏み出して鉈を奮い、それに素早く反応した獣は槍を突き出した。

私の顔の横スレスレに通つたソレにひやりとしつつ、獣の胴体に鉈が到達する。近くにいた獣は目だけで私を見ていた。

それからは半狂乱になつて鉈を奮つた。

槍が払われ、尖つた先が私の身体を裂く。それすらも気にならなかつた。

一体どうやってソイツを殺したのか分からないが、槍を持った獣はいつの間にか事切れてずりりと下に落ちていった。

息が上がっている。私は一体どうしたというのだろうか？

なぜこんなに恐怖に狂っているのだろうか？

あの目！ あの目だ！！ あの獣の目！！

あれはどこかで見ることがあるものだった。私はあの目を知つていた。

色は違う。違う、だがあれは私の知っている獣の目だった。

あれは父の目ではないか！

あのクソ野郎共は、私の父の目を奪つたのだ！

下水道に落ちた獣を追う。

梯子を下りて水の上で亡骸を晒しているソレらに近付く。

だがソレらの近くに丸まった物があるのに気づいた。

上から観察した時に分からなかつたソレは、近付いて初めて何かが分かつた。

ソレは巨大化したネズミだ。

獣の亡骸を齧ろうとしていたソレらは、三匹いる。その全てが私の存在に気付いた。

私はノコギリ鉈を變形させてリーチを伸ばし、ソイツらを薙いだ。

突き出した鼻先、顔面を鉈が削る。ネズミがギャツギャツと騒ぎ立てた。

私は阿呆のように何度も薙ぎ払い一步を進ませる。

ネズミはネズミらしく呆気なく死んでいった。

肩で息をしながら私は、かろうじて人型を保っている獣を覗き込んだ。
だ。

父の目だろうか。それが気になって仕方が無かった。

覗き込んだ目は虚ろで何も映していなかった。滲んだ虹彩は溶けた魚の目だ。

私はそれに安堵した。

下水道に落ちたものの、崩れた木クズの上に運良く乗っかっていた松明を手に取り獣を焼く。

水の中にある部分は燃えないだろうが、それも仕方のないことだろう。

私は燃える獣をぼんやりと眺めて、なんとなく、拾った槍で四つ、眼球を貫いた。